

---

# 報復屋ゼットー "Am I the number Z"

消炭灰介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

報復屋ゼットー "Am I the number?"

### 【Zコード】

N6816M

### 【作者名】

消炭灰介

### 【あらすじ】

この世のどこかに存在すると言われる復讐代行業者、報復屋ゼットー。店主代理のツユリを筆頭に運転手マツ、諜報員サイ、拷問官ハルアキ、戦闘員トウカ、技師ミモリ、祈祷師ミヤギ、医師シミズの八人の男女が所属するアングラ組織を舞台に繰り広げられる人ととの摩擦が生み出す歪みの物語。

夜は降りない。

「我々が扱う商品は感情だ。それはとても纖細ででたらめなものだから行動の果てに起こる結果は我々にはおろか依頼者にすらわからぬ」

らしい

報復屋ゼスター店主、ゼスター

たとえば今、田の前に倒れている少女に向かつて私は手を差し伸べてみる。

体は垢まみれ、服もぼろぼろ、みすぼらじいを通り越して汚らしい少女だ。

そんな少女に私は甘く囁く。

「復讐したくないか？」

「ふくしゅう……？」

意味を掴みかねるのか、少女は地面にはいつくばつたまま首をかしげる。

「そう、お嬢ちゃんをそんな田にあわせた奴に仕返ししてやるんだ」見開かれた大きな瞳は私を捉える。少女は額くと、私の手をとった。

おもしろいだろう？　これでまた一つ私の敵が増えることになる。おかしいだろう？　不思議と笑いが込み上げてくる。

そんな私を見て少女は首をかしげた。

「おじちゃんはだれ？」

少女の言葉に後ろに控えていた部下が遠慮せず噴き出す。

おそらく『おじちゃん』なるワードが彼のツボに嵌つたのだろう。ああ、さうとも、否定はしないが、私はどう見ても頭から足の先までおじちゃんだ。ただし白髪まじりの髪の毛はロマンスグレーと呼ぶようになさご。

閑話休題、話がそれてしまつたな。少女は私の名を問うた。ならば私は応えねばならぬ。世界のために、平和のために、私は名乗ろう。

「我が名はゼットー、この世の全てを敵にまわす者だ」

そう、我が名はゼットー、世界の安寧を望むただ一人の悪だ。

慎重な狗は二口銅われた恩を忘れない。

「やめてくれ、これ以上敵が増えることなんて考えたくもない」

報復屋ゼットー 謀報員、風祭彩かぜまつずい

「うう~」

なんの変哲もないオフィスビルの一室、部屋の片隅。一番偉い人が座るその席に突っ伏した状態で美少女が呻いている。

放つておくことは可能だが、ここでスルーしたら後が怖いのでサイはしふしふ、パソコンのキーを叩く手を止めずにリアクションを起こす。

「どうした？ シコリ」

サイの席からシコリの席までは少し距離があるが、一人きりの事務所は声を荒げる必要なく言葉が届く。

「めんどうかい」

シコリは机に伏したまま答える。艶やかなセミロングの黒髪は自ら搔き亂つたせいでばさばさで、突っ伏しているせいで高すぎず低すぎずの鼻は潰れてしまっている。つまり美少女台無しである。

「なにが？」

再びのサイの問いに、顔を上げ、澄んだ切れ長の瞳を細めシコリは逡巡。の後、ひねり出したように返答を口にする。

「…………け、いじ?」

「敬語……」

意味がわからない答えにサイはただ言葉を反復するのみ。

「そう、敬語、何で敬語なんてあるんだろ?めんどうかいー」

めんどくさいのはお前だ。サイは素直にそう思つ。けれど、彼女が年相応の言葉と態度が許されるのは、今この時、この場所だけなのをサイは知つてるので、努めてやさしく言葉を選ぶ。

「みんなツコリの頑張りはわかつてゐるって、ツコリがいなきやウチ  
が回らないこともみんなわかってる。だから……いつも感謝して  
よ」

「ほんと?」

少なくとも自分はそつ思つてゐるのでパソコンから皿を離さずこ  
サイは領いてみせる。

それを見たツコリは机の上に伸ばした腕に頬を乗せ、幸せそつこ  
皿を閉じる。

「ありがと」

「どういたしまして」

一人きりのオフィスにサイがキーをタイプする音だけが響く。  
その静寂を一番聞きなれた金属音が破つた。

開かれた扉から現れたのはパンツスーツ姿の女性。ベリーショー  
トの髪と冷ややかな表情からほどこかナイフを連想させる。

「ツコリ、準備ができました」

彼女の印象と同じく、霸氣のある聞き取りやすい声。

「ん、わかった、ありがとうシミズ」

そこには先ほどの年相応のツコリはない。

颯爽と立ち上がり、学校指定の枯茶色のブレザーを着る。どんどん  
け良質の髪なのか、ばさぼさだった髪は一回撫で付けただけで元通  
りだ。

ツコリが玄関のシミズの後ろについたところでサイはあることこ  
気づいた。

「コート忘れてる」

(とつて)

シミズから見えない位置での口パクはじつ見てもそつと聞いていた  
ので、サイは仕方なく先ほどまでツコリが座つていた席にかかって  
いたダッフルコートを取ると玄関先まで届ける。

そこに待つツコリが両腕を広げて『着せろ』と全身でものがたつ  
ていたのでしぶしぶ着せてやる。

シリーズがうれしそうに鼻で笑ったのは気づいていたのやう。

「では、行ってくる」

完全に仕事モードに入つたらしいシリコリは振り向くことなく片手を挙げる。

「いつてらっしゃい」

サイは手を振ることなく一人きりのオフィスから一人を見送つた。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。壹

「世界がもし百人の村だったら、百人すべてが泣いている世界より、たとえ九十九人が悲しんだとしても一人が笑つてられる世界を私は望む」

報復屋ゼットー店主代理、あまみ つゆり 雨海梅雨理

「お待たせして申し訳ございません」

待ち合わせに遅れたわけではないが商売上の礼儀としてツユリは侘びを入れる。

ダッフルコートを脱ぎ簡単折りたたんでから椅子を引き、それを背もたれに掛ける。傍を通った店員に「コーヒーを一つ頼んでから席に着いた。

「はじめまして、報復屋ゼットー店主代理の雨海梅雨理です」

偽名は使わない。その理由はいろいろあるが、依頼者の選りすぐりをサイが担つていることが大きいだろう。

「あ……和泉素恵いずみ もとえです」

ツユリの対面に座る待ち合わせ相手、俯いたまま名乗った女性は、発する言葉や雰囲気に総じて霸気がない。ツユリたちが到着するまでに頼んだであろうコーヒーには一口もつけていない。

和泉素恵、二十歳、大学一回生、家族構成父母弟、今回の依頼ではふられた男への報復を希望。だいたいの調べはついている。

「職業柄、名刺は持ち合わせておりませんので、これを代わりに」枯茶色のブレザーに深緑色を基調にしたネクタイ、それと同じ柄のスカートを身にまとったツユリは少し腰を浮かせて手を差し出す。顔には笑顔を浮かべて。

素恵はその手をとるとツユリの隣に座った女性へとおずおずと視線を動かす。

「あ、こちらはシミズ、私の秘書のよつなものですね」

ツコリが手を向けるとシミズは軽く会釈する。

「の明らかに年上の女性を呼び捨てて自分の部下だと言ひ。

「さうそくですが、契約のお話に移らせていただいてもよろしいでしょうか」

前のめりになり、机の上で手を組むツコリの横でシミズはA4サイズの鞄からファイルを出した。

素恵の沈黙を肯定と受け取り、ツコリは話を進める。

「おおかたはネットのほうでお話しましたが、最終的に今回の依頼内容は

「殺してください」

素恵はツコリの言葉を切って、静かに言った。

「はい？」

ツコリは状況をつかめず思わず聞き返してしまつ。

「殺してください」

俯いたまま素恵は語氣を強めて言ひ。その震えた声に見えるのは、はつきりとした怨嗟。

「あの……ネットでお伺いした依頼内容は中川光司さんへの肉体的制裁のはずでしたが……」

大丈夫、こういう事態は初めてではない。心の中で自分に言い聞かせ己の冷静を保ち頭の中を整理しつつ依頼者の状況を確認。

「だから……」

言つて、素恵は一拍置いた、次に起ることに気づいたツコリが場をなだめる間もなく、それは爆発した。

「殺してくださいっていつてるんです！」

素恵はなおも下を向いたまま膝の上で握った拳を震わせながら叫んだ。

幸いにも喫茶店の中には少し離れたところに客が一人いるだけだったが、それでも注文したコーヒーを持ってきた女性店員はツコリの横で固まってしまった。

「うわ～なんか久しぶりにアクトタイプな依頼きちゃったよ」と、体を傾け口を手で隠し小声で隣のシミズに愚痴つた。

「聞こえますよ、ツヨリ」

優秀な秘書のようなものらしくシミズは涼しい口調で上司をいなす。そして鞄から電卓を出しキーを弾きだす。

「では、お値段の見積もりのほうが変わりますが……」

ツヨリは横田でシミズの電卓を弾く指を確認する。

「少々お待ちください」

素恵は視線を上げないが、ツヨリは再び笑みを湛えて対応する。

「こちらに」

シミズは計算が終わつた電卓を向きを反転させ素恵のほうへと差し出す。

「こちらのお値段になりますが……」

ツヨリが手で示した電卓を見た素恵の目が見開かれる。

「え？」

その疑問の内容をツヨリは先んじて答える。

「いかに私たちがプロとはいえ現代社会において殺人といつもの相等のリスクになります。当店ではリスクに見合つた金額や物資をお支払いいただくシステムとなつておりますので」

言葉を切つて笑顔を張りなおす。

「ご理解いただけると幸いです」

「あの……」

上目使いに合つた素恵の視線はすぐ「白らの拳へと戻る。

「事前にお話ししたとおり、半額を前払い、依頼を完遂し次第もつ半額をお支払いしていただくかたちとなつております」

「あの……、私、そんなにお金なくて」

そんなことは解つていて。これは鎌かけだ。ツヨリは溜まつた唾を飲み込みたい衝動を必死に堪えた。

そんなツヨリの前で素恵は口の中で言葉を詰まらせた。

「物品での支払いも可能ですが、

どうにか笑顔を崩さずに言つた」ことができた。

「いや、そういうのも……」

「では、事前の打ち合わせでおり中川光司さんへの肉体的制裁といふことで」

「はい……」

「額いた素恵の返事の歯切れは悪く、

「お金はここに……」

鞄から封筒を出し、ツコリへと渡す。

受け取ったツコリはそのままシミズへと流すとシミズは封筒を開き、中身を確認する。

「たしかに」

「では、ご契約の確認を……」

ツコリの田配せにシミズは先ほどのファイルの中から一枚紙を出し、向きを合わせて素恵の前に提示する。

「和泉素恵さまの」依頼内容は和泉さまをはねつけた中川光司さんに対する肉体的制裁、期間は一週間以内

ツコリは紙面上の文字を指で追いながら説明を続ける。

「契約において和泉さまが注意しなければならないのは三つ」

一拍おいて、ツコリは少し語調を強めて言葉を続ける。

「一つ目、我々の行為を依頼達成のいかんに関わらず、警察、その他法的機関に通報しないこと」

ツコリは紙から目を上げ、素恵が頷くのを待つてから言葉を続ける。

「二つ目、我々の依頼遂行の妨害しないこと」

素恵は小さく頷く。

「三つ目、この報復行為が感情を因るところとした実質的な利害とは無関係である純粋な復讐であること」

納得しかねるといった表情を見せる素恵にツコリは補足説明を入れる。

「つまり、あなたはこの報復によって金や地位、名誉などを得ることがあつてはいけないということです」

素恵はようやく頷く。

「これらに反した場合は上記の違約金を払っていただくことになります。大丈夫ですか？」

素恵は頷く。

「はん」「は……」「

鞄の中から出されたのは印鑑ケース。ツヨリはそれを手でいなすとそのままその手を差し出す。

「職業柄、印鑑というものは使用しないので代わりにこれを自分を捨てた相手に肉体的制裁を加える。そんな契約書に捺印を押す。そんな契約、法が認めるわけがない。

素恵は手をためらいがちに手を受け取る。これで報復屋の契約は成立した。

「では、これより依頼の実行のほうに移ります。完遂し次第ご連絡いたしますので後金はそのときに」

立ち上がると吸い付くように上げられた素恵のさびしげな視線にツヨリは実行の内容を碎いて話す。

「具体的にはこれから中川光司さんの居場所を特定。それから肉体的制裁に移らせていただきます」

ツヨリは誰も口をつけなかつた三人分のコーヒーの伝票を手にレジへと歩き出す。後にシミズが続く。

「私！」

がた、音をたてて勢いよく素恵が立ち上がる。ここで振り返るのが商売というものだらう。

「どうかなさいましたか？」

「彼の場所、知っています！」

その言葉は彼女の誠意一杯。

「情報提供感謝します」

心の中で毒づきながらも、ツヨリは恭しく礼をすると、

「では外に車を待たしていきます。一緒に来ていただけますか？」  
彼女を外へ促した。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。武

殺して

和泉素恵は言った。

でも、その願いを叶えてくれた者は誰もいなかつた。  
何度も何度も頼んだ、しかしだめだつた。

だから、報復屋に頼んだ。

ネットで見つけたゼットーと呼ばれる報復屋。天からの贈り物か  
と思った。

それでも一瞬、詐欺かとも思った。しかしそれは本当に一瞬に過ぎなかつた。

手厚い対応や説明を受けるうちに疑念は煮えた油に入れたかのように氷解して、提示された実績やプランなどには震えを憶えた。  
やつと、やつと私の願いが叶つと。

しかし、店主代理と称して待ち合わせ場所に現れたのはあきらかに高校生の少女。

制服を着てくる時点でふざけている。

やはり、騙されたのだろうか。

これでは私の計画は台無しではないか。

素恵は下唇を噛む。

ケータイをハンドバックからだと発信履歴の最上段にある電話番号に繋ぐ。

ずいぶんと長く待たされてから相手が出た。

電話の相手は諦めたように無言だ。

「報復屋に頼んだから……」

頼りない高校生だとか騙されたかもしれないとかは関係ない、ここで口に出すことには意味がある。

「もうおしまい！」

高揚した気分をおさえきれず漏らすように素恵は声を荒げる。

相手は相変わらず無言だが関係ない、全ては素恵が望む未来への

布石。

結局、報復屋も素恵の願いは叶えてくれなかつたことになる。

自分の願いを知るのは自分だけ。

自分の願いを判るのは自分だけ。

自分の願いを叶えられるのは自分。

通話を切る。

荒い息を整え素恵はトイレを後にする。

「計画は狂つたけど、最後は私の手で……」

呟く彼女の瞳には暗く影が宿つた。

道化師は仮面の底で薄く笑う。参

「めんどうなことになつた」

ツヨリは喫茶店の表で待たさせておいた八人乗りワンボックスの一列目シートへ乗り込むと現状を簡潔に報告した。

めんどう。そうだ。

居場所と行動時間を突き止めて、後日、足の骨を一一本もらう。こんな気の進まない仕事はそれでおわりのはずだった。

しかし、彼女は殺せと言つた。報復屋としての復讐行動は依頼人が被つた損害量の関係である程度決まつていて。だから彼女がどんな依頼をしようが報復屋ゼットーの行つ活動は最初から決まつていた。そこに不満を持たせず依頼者の意識を誘導するのがツヨリの仕事だ。

「依頼主が同行することになった」

ツヨリは言葉を続ける。

様子を見る限り、彼女はもう限界だ。抑圧された願望が弾けるのに必要なのはほんの少しの起爆材か少しの衝撃。

「彼女はもう限界だ。このままでは私たちの存在が無意味になつてしまつ」

そう、それは報復屋の存在意義。ツヨリを始めとするゼットーの夢。

「今は野放しにするより目に見えるところにおいておきたい」

爆弾を爆発しないように運ぶのはことだが見ていないところで爆発されるよりはましだ。

「で、その依頼主は？」

一通りのツヨリの考えに運転席に腰掛ける壯年の男　　マツはワンボックス内の成員を代表して問う。

「トイレだ」

会計の後、和泉素恵はツヨリに断りを入れ、トイレへと向かった。

簡潔な答えに、マツは腕まくりしたスースから覗く浅黒い両腕をハンドルに乗せることで頷きの代わりとする。

「どういうことだ？」

その問いはツヨリの後ろ、三列目のシートから。

後ろに控えたハルアキは長身瘦躯に一枚目。軟派の代表のようなその男は、一列目のシートの頭を抱きつつツヨリに向かって薄ら笑いを浮かべる。

「餓かもしれないってことだ」

答えたのはマツ。

復讐依頼を装った報復屋への報復。過去にそのような事例がないわけではない。しかし、

「サイの奴がしきるとも思えないがな」

マツの言葉に一同は同意のはずだ。

サイがゼットーに加わってからはそのようなことが起つたことはない。

「とにかく今は情報がほしい」

親指を唇に押し付け、爪を噛むのを必死に我慢しながらツヨリは携帯電話を取り出す。

「くそ、なんで肝心なときにサイ<sup>アイツ</sup>は出ないんだ」

電波は届いている。話の中ではない。だがサイは電話に出ない。

ツヨリは苛立ちを隠さうとせず、携帯電話を握る手を振るわせる。

「大丈夫」

そんなツヨリの頭に後ろの席から手を乗せられる。

その手を両手でそつと握り返してツヨリは振り返る手の主へと振り返る。

ハルアキの隣にちょこん、と座る小さな少女は色々な意味で人形のようだ。シートに散乱する長すぎる黒髪は某日本人形、その髪の隙間から見える精緻な相貌はフランス人形じみていて、席に端座する姿とサイズはまるで少女趣味の愛玩人形のよう。

「ありがとう、トウカ、でも、できるだけリスクは避けたいんだ」

トウカと呼ばれた人形のような少女は、長い髪をゆらしてカクンと頷く。

「どうすんだ」

マツの問いに迷ったのは一瞬、立ち止まることは許されない。それがゼットーを預かる者としての資格。

「このまま依頼を続行する。ハルアキ、トウカ、いけるな」  
シコリは常に最悪を考えて動いている。ハルアキとトウカを連れてきたのもそのためだ。

「おう」

ハルアキの了承。

続いてトウカも力クンと頷く。

ハンドルにもたれかかったマツの目配せに外を見ると、外に控えたシミズからの合図。

素恵が喫茶店から出てきたようだ。

シコリは一旦外に出ると、素恵を向かい入れる。続いてシミズも助手席に乗り込む。

「ゼットーのメンバーです。後ろの一人はバイトですが皆優秀なので安心してください」

車内をきょろきょろ不安げに見渡す素恵にシコリは説明を入れた。  
「あの、先ほどの居場所がわかる、というのは……」

「G P Sが、あの人、横着なんでまだ解約してない」と思います

膝の上で握った拳に視線を落として素恵は言つ。

G P S サイに任せれば簡単だったものを……シコリは心の中で咄嗟しながらも笑顔を貼り付けたままこう言つた。

「助かります」

シコリの指示でマツはエンジンをかける。

報復屋ゼットーと依頼人を乗せたワンボックスは依頼達成へと走り出した。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。肆

「私たちのこと喋っちゃいましたね」

そう判断したのは、まず人数。シミズとマツをワンボックス内に残し、中川光司の潜伏先 なんてことはない、彼は自宅のマンションに居た に素恵の同行をしぶしぶ認め、三人を連れ立つて扉を開ければそこに居たのは中川光司、と、いかにも柄の悪そうな、明らかに目つきの悪い男が三人。

「あの……すい、ません」

素恵は俯いたままぺこりと頭を下げる

「二つ目！ 我々の依頼遂行の妨害しないこと！」

突然叫んだツヨリに素恵はびくッと身をすくませる。

ツヨリ一瞬、顔をしかめてみせて、につこりと早変わり。これぞ  
顔芸、ツヨリの商売道具。プロの成せる業。

「まあ、今回はサービスします」

判断した材料のもう一つ、これがなかつたら「へえ～柄の悪いお友達がいらしゃったですね」で終わつたものを、三人の男は素恵を認めるなり、唐突にバタフライナイフを展開し、敵意むき出しで突っ込んできたのだ。

「三人か……足りないな」

ツヨリは酷薄に頬を歪め、上唇の端を小さく舐める。

正当防衛は報復屋の主義に反しない。

「ハルアキ！ トウカ！」

呼ばれてツヨリと素恵の前に飛び出したのはトウカ。

小柄な体は狭い廊下を土足ですぐりと抜け、長すぎる黒髪を舞い散らし一直線に先頭の男へと向かう。

トウカはツヨリと同じブレザーの背中に手突っ込むと、そこからサバイバルナイフを取り出す。

刃渡り二十五センチほどの片刃のナイフは明確に一般のサバイバ

ルナイフとは違う部分がある。

厚めに設計された刃は縦に一本、幅一センチ程の切れ込みがあり、中央で刀身を半分に分断していく。柄は先端がT字型に張り出している。ゼットーの技術者エンジニアミモリ手製のナイフ。名は薄紫。  
俗にソードブレイカーと呼ばれる形をとつたそれは形状こそナイフに酷似しているがその本質は盾。特にトウカの持つそれは敵が持つあらゆる凶器を無効化するためだけに作られた一振り。一切の刃物をへし折り、鉄を切り裂く。しかし人を傷つけることは決してない。

そしてトウカ自身の存在もまた盾。

「あの二人、双子なんです、お姉ちゃんと弟で」

背中を見守るツヨリは世間話レベルで素恵に話しかける。  
飛び出した姉は男のナイフを自分の薄紫<sup>ナイフ</sup>の切れ込みにすべり込ませる。T字型の薄紫の先端を空いている手で握り、瞬間に力を込める。薄紫を回転させて、ここで男のナイフを折った。

折られたナイフの刀身ははじけ飛び地面に突き刺さる。

「お姉ちゃんのほうは物を壊すことに長けていまして、弟のほうは

」

続いて、飛び出したのは弟、ハルアキ<sup>ナイフ</sup>を折られ、退こうとした男に足を踏み、退路を絶つてから掌底を顎に叩き込む。バランスを崩した男は床に倒れこんだ。

相対的な筋肉量でいうならば男のほうが確実に上だろう。しかし、体重移動と腕を伸ばすタイミング、急所を見極める目、これらを駆使して人を壊すハルアキには勝てるはずもない。

「人を壊すことに関しては右に出る物はありません。心根が真性のサドなんですよ」

言つてツヨリは素恵に笑つて見せる。対する素恵は驚きを隠さず表情にだす。

それはツヨリの言葉にではなくこの現状に対する驚きだろう。高校生の少年少女が大の男を一人、鮮やかにのしたのだ。

姉弟の進撃は止まらない。

ハルアキは次の男のナイフを持つ手を右手でいなし、臆せず、退かず、さらに一步踏み込む。

もちろん前へと出る足は、倒れた男の顔面を踏み抜くことを忘れるない。

そのまま、身をよじり顔面に向けて渾身の左ストレートを放つ。男はハルアキの拳をボクシングのスリッピング・アウォーのように上体を反らして躱す。その死角から現れたのは三人目の男のナイフ。狙いはハルアキの右目。虚を突かれたハルアキは反応できない。しかし目を瞑ることは決してしない。

がき、という金属音。トウカの薄紫がハルアキに迫るナイフを絡めとり宙へ弾き飛ばす。

躱されて宙を浮いたハルアキの拳は、上体を反らした男の襟首を掴み、ぐいと引き寄せる。体勢が崩れていた男の身体はいとも簡単にハルアキへと向かう。ハルアキの片足が地面を離れる。ちょうど速度の乗った男の鳩尾（おもおち）に膝が決まる。

男は声も出せぬまま膝をつき、その場に崩れ落ちた。

しかし、おかしい ツヨリは妙な引っかかりを感じた。

狭い廊下のような空間での戦闘は絶妙なコンビネーションが必要とされる。それがなければただの一対一の勝ち抜き戦になってしまふからだ。そのことにおいてはハルアキとトウカの右に出る者はいないはずだ。しかし、違和感がある。男たちの戦闘は一人の戦闘には及ばないものの決められた統率が見える。

「ツヨリこいつら素人じゃない解決屋（トラブルスター）だ」

三人目の男の胸倉を掴むとハルアキは壁に押し付けて叫んだ。拳を交えたハルアキが一番違和感を感じていたのだろう。それに彼は何度かその手の者たちと手合わせしたことがある。

「解決屋？」

その質問は、ツヨリの隣、素恵から。

「我々の同業者です」

そして、仇敵。

素恵が中川にゼットーの旨を話したのはおおかたトイレに行つていた頃だとツユリは当たりをつけていた。しかし……中川の対応は早すぎる。

ゼットーも早急に対応した。現に喫茶店を出てから一時間弱しか時間は絶っていないはずだ。

だとしたら、最初から素恵の報復を予知していた?

分からぬ。情報が少なすぎる。

「おまえ、所属は? L C V R 社か? ベゴニアか?」

壁に押し付けたままハルアキが問う。

しかし、解決屋を始めとする報復屋の同業者たちは部下の教育だけは真面目にする。簡単に口を割るわけもない。あるいはハルアキなら可能かもしれないが今はそれが目的ではない。

ハルアキも分かつているのだろう。男が顔を背けたと見るや、膝を腹部に叩き込み昏倒させる。

「おい、お前ら!」

その声に一同が振り向く。

金髪を逆立てた髪、顔立ちは一枚目半といったところか、戦闘の蚊帳の外だった中川光司だ。

右手に握るのはトウカが先ほど弾き飛ばしたナイフ。左手に抱くのはそのナイフを飛ばした本人、トウカ。

「武器を捨てる、女!」

中川は黒髪を搔き分けてトウカの首筋にナイフを当てる。

トウカは特に反応を見せず、薄紫を取り落とす。

「寄るな! こいつがどうなつてもいいのか!」

ツユリは心の中で毒吐く。通常の思考回路の持ち主なら二人の男を負かした彼女を人質にとるなどありえないだろう。あるいはそれが分からぬほどに追い詰められているのかもしれない。どちらにせよ中川の行為はこの場において正解だ。

武器を持っていない人間に対してもトウカは無警戒で無力だ。

そしてトウカは人間を含むありとあらゆる生き物を傷つけること  
ができない。

中川の持つナイフは男が持っていたものだ。それを咄嗟に拾つて  
トウカの首に押し当てたのだとすれば彼女が不覚をとつたのも納得  
がいく。

動くことのできないツヨリとハルアキの後ろ。ふらりと立ち上がる影が一つ。

素恵だ。手にはトウカが折ったナイフ。彼女は刃だけになつたそれを強く握り締めている。掌から流れた紅い血がナイフを滴り、地面へと落ちる。

一滴、また一滴と、滴る血液に合わせて、素恵は中川へと歩を進める。

「光司……」

独白のよつに咳いて、素恵は虚ろな目で元彼氏を見据えた。

> i 1 2 4 2 2 — 1 4 5 7 <

トウカの武器『薄紫』

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。伍

許せない。

素恵は憤りを覚えながら元彼氏の許へ向かう車の中で握った拳を小さく振るわせた。

それから隣のツヨリの存在に気づく。  
少し顎を上げ、隣に佇むツヨリの表情を窺う。

そこには笑みを張り付けた大和撫子。

素恵は高校時代体型に悩んだことがあった。食事を制限して腹や一の腕の肉と戦い、体重計と睨み合う毎日。今でこそ食事と運動に素直に反応する身体になつたが、心と身体が不安定な世の女子高生が少なからず一度は通る悩み。だと思っていた。

しかし、この隣の少女はどうだ？

そこそこの身長、しなやかな黒髪、すらりとした長い手足。それでいて決して痩せすぎではない健康的な肉体美。

そして、見る者をはっとさせる端正な顔立ち。若干の幼さの残る相貌は可愛さと美しさの黄金比を取つたように見る者を惹く。  
そこまでの素材は誰もがうらやむものだ。

しかし、報復屋。

なぜ、こんな少女が？

素恵は頭のなかでツヨリという人間の背景を数パターンつくる。だが、どれも答えからは程遠い気がした。

すべるように眦まなじりに移動したツヨリの目と素恵の視線が交錯した。ツヨリは容態を窺うようにやさしく素恵を覗き込む。

見られただろうか？ 怪しまれただろうか？ そんな疑念が浮かんだが、先ほどの喫茶店でのことを思い出し、今さらどうしようもないということを悟り、再び視線を膝に握った拳に落とした。  
これから、報復に向かうのだ。

許せないあの男に会う。

許せない。

私の、願いを一度も聞いてくれなかつた。

許せない。

私の、ことを袖にして他の女に乗り換えた。

許せない。

私が、警告したにもかかわらずまだ自宅で悠然と過ごしている。

許せない許せない許せない。

報復屋の少女は車に残るようになつたが、素恵が頼むとあつさり承諾してくれた。

ツヨリは先ほど紹介されたバイトの男女と一緒にオートロックを何故かパスワードで抜け、エレベーターに乗り込む。

素恵は同乗した男女を横目で見る。

黒髪の少女は割と小柄な素恵よりさらに小さく伸びすぎの黒髪は目元どころか顔のほとんどを覆つてしまつてゐる。しかし髪のすきまから見えた顔立ちは人形のように整つていてツヨリとはまた別の美しさを感じた。

百八十に近い身長と一枚目代表のような容貌をもつ男のほうは軽薄な笑みを絶やさず腕を組みエレベーターの壁に背をあずけている。ツヨリは迷わず五階のボタンを押した。素恵は何も教えていないのに。

駅から程近いこのマンションの五階。素恵が何度も通つたことがある彼の自宅だ。大学生に不相応な家賃のそこは親のすねかじりの体現。

これから彼と久しぶりに顔を合わせることになる。

素恵は、三人に気づかれないように静かに小さく溜息をついた。

しかし、出迎えは中川光司ではなく、見知らぬ男三人による手荒なものだつた。

姉弟と紹介された一人は三人の男をいとも簡単にのしてみせた。

だが、そこからが悪い。

あろうことか、光司は報復屋の少女を人質にとつたのだ。

許せない。

何故……。

許せない

何故、その腕に抱かかれているのが私ではないのだ。

何故、そこに居るのは報復屋の少女なんだ。

素恵は折られて突き刺さったナイフを握り地面から引き抜く。肉が手のひらから削げる感覚がした。

怒りのせいか不思議と痛みはない。

「光司……」

素恵は光司を見据える。そして、ゅうつゅうつと聞合<sup>ごう</sup>を詰める。

「ぐ、るなあ！」

唾液を派手に飛ばして、光司が叫ぶ。

まるでその言葉が聞こえていないかのよつて素恵の歩みは止まりない。

ナイフを振りかざす。

狙いは光司の腕の中の報復屋、トウカ。

「うつ」

しかし、ナイフは彼女には届かず。弾き飛ばされる。衝撃でさらに手のひらが裂け、血が溢れ出す。

「あ、ああ……」

途端に込み上げてきた痛みに素恵は呻きを漏らす。ああ、違う。

私はこんなことをするためにここに来たのではない。

「私は……」

素恵は身を翻すと窓を開け、ゴミが積まれたベランダに出る。背後で騒ぐ音は素恵の耳にはもう届かない。

頼りない足場。踏みしめるといつぶれるポリ袋をよじ登り、転落防止用の手すりに手をかけた。

それでも素恵の歩みは止まらず、手すりに今度は足をかけ、その上に立つた。両手を広げ、危なげにふらつきながら振り向く。見つ

める先には中川光司。

そして表情は怒りから微笑へと。

「光司、私もう待てないから」

ああ、やつと私の願いが叶う。

足が手すりから離れ、素恵のからだがふわりと浮く。

「ばいばい」

そして、彼女は空に消えた。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。陸

中川光司の幸運はトウカを人質にとつたこと。彼女ならたとえ自分が生命の危険にさらされようともあらゆる武器攻撃を完封できる。

素恵の手のひらで閃いたナイフまっすぐトウカへと向かわず、興奮気味の素恵は中川の顔面へとナイフを滑らす。しかし、光司の目前でトウカの振り上げた足に阻まれた。

ナイフの切つ先はトウカの靴底の踏み抜き防止鉄板に当たり、ぎり、と金属を搔く音を出して弾き飛ばされる。

「あ、ああ……」

広がった傷口から溢れる鮮血を見て素恵は呻きを漏らす。

その奥で慄いた中川がトウカの拘束を弛める。

その一瞬をソユリは見逃さない。

「ハルアキ！　トウカを

確保しろ。

次の言葉は出なかつた。

ソユリの影で呆然と立ち尽くすハルアキ。

(そうか……)

ソユリは歯を食いしばる。

中川光司の幸運はトウカを人質にとつたこと。

彼女を人質にとることにより、ゼットーの主戦力であるハルアキを無力化できる。

まるで狙つたかのように続く不幸に成すすべもなく、ソユリはただ場の緊張に身体を強張らせる。

瞬間。ソユリの耳によく聞き慣れた音楽が響いた。突然鳴り響いた音に肩をびくつかせる。それが自分の携帯電話の着信音だと気づくのに一秒要した。

トップカーテンとフーガ二短調。最近はご無沙汰だったが忘れることが

はない、サイからの着信だ。しかし、この状況で出れるわけがない。

「おい、素恵、やめろ！」

中川の戦慄を含んだ叫びにツコリは視線を上げる。見れば依頼人はポリ袋が敷き詰められたベランダで「ミミを足場にしながら手すりへと昇っている。

「素恵！ なあ、帰つてこいよ」

中川はトウカにナイフを当てたまま説得を続ける。素恵は手すりの上に立つと振り返つて言つた。

「光司、もう待てないから……」

その言葉は微笑みとともに。

夕日を背に立つ彼女は全てを悟つたよつ。

「な、なあ、考え方、素恵」

ついに中川はトウカを放し、ナイフを捨て、両手を広げて一步、相手の出方を窺うように慎重に近づく。しかし懇願は虚しく素恵の双眸は閉じられる。

「ばいばい」

言つが早いか素恵の身体はゆっくつと<sup>左</sup>に円を描くよう<sup>右</sup>に後ろ向<sup>左</sup>きに倒れる。

「うわああああああ！」

男の叫び、それは鼓舞であり恐怖を消し、勇気を振り絞る道具。飛び出したのは三つの影。

先頭を切るのは中川光司、素恵の一一番近くに居たかれはいち早く反応し、「ミミに足が沈むより早くポリ袋の上を駆け素恵の後に続き空へと飛び立つ。

「おいおい」

続くハルアキも一つ飛びに手すりに足をかけ空へ、空中で素恵を抱きしめるようにして捕まえた中川の足首を右手で捕らえる。そして左手を手すりへと伸ばす。身長も高くそれに加え手足も長いハルアキにとってこの距離で手すりを捕らえるのは容易であった。捉えた右手の先の一人は重力の成すまま落下する。

伸びきったハルアキの身体に一人の全体重の衝撃がかかる。

「つ

かくん、と三人の動きは一瞬停止し、そしてまた動き出した。衝撃に耐えられずハルアキの左手が手すりからはずれてしまったのだ。

三人は重力に従うまま地面に向かう。ハルアキの左手はどこか捕まる場所を探して彷徨う。

その左手が温かい何かに包まれる

始終を見守っていたツヨリは先ほどから鳴り続けていた携帯をとると通話ボタンを押し耳にかざす。

相手も耳にかざすのを待つてから、ツヨリは話し始めた。

「もしもし?」

『もしもし』

相手の声には少なからず怒りが含まれている。

そんなことは歯牙にもかけずツヨリは通話を続ける。

「あ〜、何にか用だつた?」

『まあな』

今度は少し息が荒い。苦しそうだ。

「けつこう急ぎ?」

『今回の依頼件で、依頼者の情報だつたんだけど、もう必要ないみたいだ』

『一応、訊かせて』

『まあ、依頼人のことを少し訊き込んで、依頼人のブログを見つけたんだけど……後ででいい?』

『おー、ご苦労だったね』

心から漏れ出すサディズムに対する興奮を隠すことなく、ツヨリは声を若干弾ませる。

『あ〜、もう切つていい?』

『なんで?』

ツコリは笑いを堪えた。サイは電話の向こうで溜息を小さくつぶ。

『片手で三人を支えるのは限界なんすけど』

ほらせつせとあがれハルアキ、と電話の向こうで会話が続く。

飛び出した三人の影の最後の一人、それはサイだった。玄関の扉を開くと、まるでこつなることを予知していたかのように一目散にベランダへ駆け寄り、手すり越しにハルアキの手を捕まえた。

「ご苦労様」

ツコリは三人を引き上げ、リビングへと戻ったサイに労いを投げかける。

「誰かさんのせいで余計な労働をしてしまった気がする」解放されて床にへたりこんだトウカに手を貸しながら、サイはぼやぐ。

「お手柄だつたなサイ」

微笑みながらツコリにそう言われたサイは大きく溜息を吐く。いや、と頭を振り、

「今回は俺のミスだ」

サイは携帯を開き、田当てのサイトを開くと画面をツコリのほうに向け掲げる。

「これは？」

ツコリの問いにサイはベランダに引き上げた三人をを横田で見る。ハルアキは具合を確認するように肩をぐるぐる回しじからに向かってくる。

和泉素恵と中川光司はなにやらその場に座り込んで抱き合つていた。

素恵と中川の注意がこちらに向いてないことを確認してから、サイは少し音量を抑えて喋りだす。

「和泉素恵のブログ」

ツコリが覗く素恵のブログには『殴つて』から始まり『殺して』に終わるあらゆる陵辱を渴望する文字が躍っていた。

田を細め画面を追う。ツヨリにサイは続ける。

「DVD願望だつて」

言葉は顔を上げたツヨリの田を見てから、

「ブログだけじゃ確信できなくて……演技しての可能性も捨てられないから和泉さんの大学まで聞き込みしてきた。そしたら友達間では結構評判らしくて」

サイはツヨリに向き直り頭を下げる。

「申し訳ございませんでした。俺のミスです」

電話に出れないくらい焦つてた、と付け足す。

「でもおまえは自分で收拾をつけた」

サイのがら空きの後頭部へ、ツヨリは軽くゲンコツを一発。

「それでいい」

さて、とツヨリは腰に手をあてる。

「あとは、あれだな」

言つてツヨリが指差した先は、中川は溜めで抱き合つ、といつより中川が一方的に抱きしめている形の一人。

「落ち着いたか」

宥めるように背中を撫でる手は優しく、中川は素恵の耳元でささやいた。素恵は無言で頷く。

「じゃあ」

「あのー、おじやまします」

中川の言葉を遮ったのはツヨリ、空氣が読めないのではなく、あえての突入だ。

「落ち着きましたか？」

ツヨリは聞いていたのであって中川と同じ言葉で対話の口火を切る。

素恵は首だけでツヨリのほうを向き、小さく頷いた。

続けて、ツヨリが依頼の件を話さうとするべく、  
ぶわ、と素恵は涙を流し始めた。

とめどなく溢れる涙は頤をつた中川の肩に染みをつくる。

「こわかつた」

震える声でそう言つと、いつそ涙を溢れさせ、素恵は中川の胸に顔をうずめてしまつた。

「あの、報復屋の方ですよね」

代わりに口を開いたのは中川光司。ツユリが頷くと言葉を続ける。「お代は僕がお支払いするんで、今はそつとしておこてもらえませんか?」

ここで笑顔で頷けない者は商売人でないだろつ。

「はい」

そう言つたツユリの笑顔は若干、微量、ホントにほんのりと少しだけ引きつっていた。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。漆

一応依頼終了」ということと相成り、報復屋ゼット一行はワンボックスに乗り込み、事務所へ向けて走行中だった。

「へえー、世の中には変わった奴もいるもんだ」

それは、事件の顛末をツヨリから聞いた運転手、マツの感想。自分たちのことを棚どころか屋根に上げての意見である。

「おそらく。でも上手くいくんじゃない？あの二人。あの娘も心の底から暴力なんて望んでたわけじゃないだろ？」

「なんでわかる？」

バクミラー越しにツヨリの表情を窺いつつマツは問う。

「じゃなかつたらあそこで泣かないでしょ？」

ツヨリはなかなかに投げやりな態度で言いやる。正直イレギュラースキル今回の一件に、疲れたのだ。

「でも、男にはもう新しい女が居るんじゃなかつたか？」

ハルアキが三列目から身を乗り出しツヨリに問う。

「あれは、中川が解決屋に依頼をしてる電話を彼女が勝手に勘違いしたらしい」

「どこをどうやつたら勘違いするんだか」

手で払いながら答えると、ハルアキはおとなしく席に着く。勢いよくシートに着いたので隣に座るトウカの小柄な身体が少し浮いた。「で、結局俺が死にかけたのは……お前の所為か！」

ハルアキは再び腰を浮かすと一列目で小さくなっていたサイの首を絞めにかかる。

「でも珍しいなサイがしくるなんて」

マツの問いにハルアキに喉を押さえられているため返答できないサイは左手を伸ばし震えながら何故か親指を立てた。

バクミラー越しにそれを確認したマツはけたけたと笑う。

助手席のシミズもくすりと小さく笑った。

「我々が扱う商品は感情だ。それはとても繊細ででたらめなものだから行動の果てに起こる結末は我々にはおろか依頼者にすらわからぬ」

窓ガラスに頭を預け、空ろな瞳で外の景色を眺めていたツユリがぼそりと呟いた言葉に、一瞬、車内の時間が止まる。

「それ、ゼットーの受け売りだろ」

時を動かしたのはハルアキの手からなんとか逃れたサイ。

「ばれたか」

ツユリは頭の位置を動かさずに目だけでサイを見て、べつ、と舌をだす。

そして少女は薄く笑う。自嘲するように。夜を嘆くように。全てを悟ったようだ。

吹きすさぶビル風を切り裂いて、ゼットー一行を乗せた車は陽が沈んだ街を静かに走り抜けた。

## 道化師は仮面の底で薄く笑う。漆（後書き）

道化師は仮面の底で薄く笑う。これにてアです。  
ありがとうございました（――）m

余談ですが、

この物語の主人公は実はサイです。

今、驚かれた方も多いと思います。ここまで話で、奇跡的に出席率の少ない主人公ですから。留年ぎりぎりです。  
では、ツユリは？

ヒロイン……ではありますん。

ツユリもまたこの物語の主人公なのです。

これは消炭の心の問題かもしれませんが、

ツユリは物語におけるトリガーや小道具的な立ち位置に収まるのではなく、

心の葛藤や成長を描いていけたらなと思っています。  
だから、この物語には二人の主人公がいるのです。  
なので、ツユリには”魅力”ではなく”人間”を感じもらえた  
な、なんて思っています。

非常に生意気なこと言つてしまませんでした。

では、ヒロインは？

……トウカ、ですかね。あと依頼人の女の子たちとか。ゼットーム  
ンツではあと一人女の子（？）が登場する予定です。

## 人形は啼かない。 壱

「他人を……恨む？ そんなことより私、消えてなくなりたい」

報復屋ゼットー 戦闘員、敷<sup>しき</sup>冬<sup>とうか</sup>夏<sup>とうか</sup>

「おまえな、だから、いつも詰が甘いって言つてるだろ」「報復屋ゼットーのオフィスにはツユリの説教がねちねちと響いていた。

「あの！」

びし！ と効果音がつきそうなほど優等生よろしく手を挙げたのは、その説教の矛先であるハルアキ。

ツユリは「ああ？」と時代錯誤の不良学生よろしくこめかみをひくつかせながら発言を認める。

「なんだ？」

「正座したほうがいいですか？」

ハルアキは怒られていることをまったく理解していないかのように意味深なことをのたまう。

「おまえがシバかれるのもいけるくちだなんて知らなかつたよ」「ツユリの形のいい眉が勢いよくつりあがる。キレる寸前だ。

「そりやもうツユリみたいな美少女だつたらいつでも

ぶち。

「ひつ」

何がが切れる音の後に続いたのは、少し離れたところで一人のやり取りを見守っていたトウカの悲鳴。

トウカは床に座り、身を潜め、引き出したライムグリーンのオフィスチエアに身を隠す。視線は全く隠せていない精神的防壁の後ろでトウカはわなわなと小動物よろしく震えていた。

「ただいま」

ドアが開け放たれると同時に発された言葉はトウカには救世主だつたが、本人には最悪のタイミングだった。

ぎらり、とツヨリにじばつちり氣味に睨まれ、サイはドアノブを後ろ手に身を堅くする。

「ご苦労」

「まいど」

言葉にまつたく真心がこもっていない労いに、サイはとりあえず、キャッチボールになつていないうめき声を返しながら左手につながれた紐を引っ張る。

「サイ！」

控えめに声を上げ、とてて、とトウカは小走りに近づく、サイの後ろに身を隠し、今度は完全に恐怖の発信源である二名を視界から消すことに成功した。が、

「きやつ」

短い悲鳴をあげ、床に押し倒される。

トウカは自分を押し倒した相手を確認する。サイの左手から伸びる紐に繋がれたそいつは、白黒の滑らかに伸びた毛並み。長く逞しい尻尾。狼を連想させるその身体、シベリアン・ハスキー。名前の通りシベリア原産の大型犬だ。

「こら、龍之介！」

サイが紐を引いて制すと、龍之介と呼ばれたシベリアン・ハスキイは今度はサイに向かつて飛びついた。

龍之介からすればじやれてるだけなのだろうがサイズがサイズだけにシャレになるレベルの突進じやない。さすがのサイも半歩よける。

「問題はなかつたか？」

言葉とは裏腹に欠片も心配した様子を含めず、ツヨリは問う。

「いや？ 別に」

サイは龍之介の首元をわしょわしょしながら顔を向けずに答える。「何？ 今回の依頼」

業務報告に疑問をはさんだのは、すでに正座状態のハルアキ。

「おまえは本当に何も聞いてないんだな」

ツヨリは呆れきった様子で溜息を一つ、言葉を続ける。

「今回の依頼は隣家の騒音被害への報復としてそこの家の愛犬を誘拐

「ま、一週間くらい預かるだけだけどな」

ちょうど龍之介をお座りさせたサイが補足説明。

「今日はサイが適任だったからな、一人でやってもらつた」  
家主のスケジュール把握にピッキング技術。現場に痕跡を残さない慎重な作業。いずれもこのゼットー内においてサイの右に出る者はいない。もはや天職の領域に至る今回の依頼はサイ以外の人選はありませんでした。

「ミモリとマツも出張中だし」

またもサイが補足説明。

「きやつ」

サイが話に集中を分断した隙を狙つて龍之介がまたトウカに飛びついた。

「なつかれてやんの」

「そ、そんなことない！」

ハルアキの茶々入れを否定しつつトウカは龍之介の下でもがく。  
しかし、小柄なトウカには体重差のせいで這い出ることはできない。  
それどころか龍之介はトウカの顔をべろべろ舐め始めた。

「やっぱり懐かれてる」

言つて、ハルアキは心底面白そうにからからと笑う。

「なんで懐かれるか教えてやるつか？」

ハルアキの悪ノリに便乗してサイもいたずら心を働かせる。龍之介を抑え、トウカを救出しつつ、じくじくと何度も首を縦に振るトウカを起こしてから答えを返す。

「それはな……」

サイは言葉を切つて少し悪そうな笑み。

トウカは答えを待つように長すぎる前髪から無垢な瞳を覗かせてサイを見上げる。

「いのあいだミヤギにひそり動物に好かれる呪いをかけておいてもひつたのだー」

雰囲気に乗せられてトウカ自身もなんだか分からぬ恐怖に、トウカは目をぎゅーっと閉じてぶんぶんと首を振る。

「あんまり、トウカをイチめるな、そんなことないぞ、龍之介は誰にでもやさしいんだよな」

助け舟とばかりにツユリは男一人を諫める。龍之介の前にしゃがみこむとサイが先ほどやっていたように首の下を撫でようとした。

かふ

ツユリの笑顔が固まる。

次いでオフィス内に響くハルアキの大笑い。

龍之介がツユリの差し出した手に噛み付いたのだ。

無論あまがみなのだが、龍之介は加えていた手を解放するとつまらなそうに鼻を鳴らし、そっぽを向いた。

「動物はいい人か分かるんだよ、ほら、わん公、にっぢーーー」

言いいつつ、笑いすぎて涙目の中アキは手招きする。

龍之介はそれに弾かれたように反応するとハルアキの前まで駆け寄り、

ガブ

「痛つてー！」

情けない絶叫。

今度は笑う者はいなかつた。

「動物はいい人か分かるんだよなー」

再び自らの許に帰ってきた龍之介をわしょわしょしながら龍之介にサイは話しかける。

龍之介はその言葉に答えるようにサイの顔をベロベロ舐めまわす。

そして、しなければいいのに、その龍之介の背中をトウカがおそれおそる撫でた。そのときだつた。

龍之介は身体をよじってその場で華麗なターンをきめ、再びトウカを押し倒す。

トウカがもがくもやはり脱出は不可能だった。

「うう」

龍之介の下で力なく呻く。もはやどうしようもない。ずり、と暴れていったトウカの小柄な身体が引き抜かれる。ハルアキがトウカを引きずり出したのだ。

そのままトウカの脇を捕まえて立ち上げる。

乱れた服を整えるトウカの横で噛まれた手をさすりつつハルアキは言った。

「じゃあ、もう遅いし、俺たち帰るわ、お疲れ様」

「お疲れ様」

噛まれた手を抑えながら退出する弟。姉もひょこひょことその後に続いた。

## 人形は啼かない。武

家族四人で遊園地に行つた。

姉は相変わらず無邪気にはしゃいで、弟も相変わらず姉にべつたりで、でも父と母はそんな二人の背中を見ても微笑みを見せず、ただ地面を見下ろして淡々と何かを話し合っていた。

それが、トウカの記憶の中で一番古いハルアキの記憶。  
そして、トウカの記憶の中で唯一の父の記憶。

父の訃報を聞いたのは桜の木が青々と葉をつけた頃。

入学して間もなく、といつてもトウカの存在がクラスで浮き始めるには十分な時間だつた。

中学時代「顔が気に入らない」とクラスの女子たちからいじめに遭つた。なんてことはない男子の氣を惹いてやまないトウカの容姿に対する可愛い嫉妬だつたのだが、鈍感に加え、当時から人との摩擦を避ける傾向にあつたトウカはその言葉を真に受け、髪を伸ばし始めた。伸ばしたことによつて母親の口からは「顔は出したほうが可愛いのに……」なんて言葉も漏れたが、もともとトウカは自分の容姿には興味がなかつたし、氣を惹きたい異性がいるわけでもなかつたので正直、どうでもよかつたのだ。

晴れてトウカに降りかかるいじめは消え、事なきれ主義のトウカとしては穏やかな日常が戻つたことに安堵した。

同時に、トウカに寄り付く人間も消え失せた。元とはいひじめの対象だつたことやその奇異な容姿が影響してクラスメイトたちはだんだんとトウカを敬遠するようになつていった。

そして、元から口数の多いほうではなく落ち着いた気性だつたトウカは生活においてほとんど言葉を発する機会が消滅した。

高校に入学してもそれは変わらなかつた。入学初日の自己紹介でもほとんどの生徒がトウカの異様な容姿を奇異の目で見つめた。普

段の生活も変わらない。周りの人間と打ち解けるなんてことは夢のまた夢、大量の水に落とされた一滴の油のようにトウカはクラスから浮いていった。

そんなときだつた。父が死んだ。と父の父、トウカの祖父から母親宛に連絡が入つたのは。

受話器を手にしたまま地面に崩れ落ち、声なく泣いた母をトウカは今でも覚えている。

父との記憶など皆無だつたトウカは泣けなかつた。ただ、心の底で大切なものが壊れゆく感覚は初めてではなかつた。

父の実家で行われた葬式には母と一人で出向いた。親類縁者のほとんどが集まり、トウカの父は多くの人に見守られてこの世を旅立つた。

そのときトウカは両親が離婚してから初めて父方の祖父母に会つた。祖母はトウカの髪を左右に分け、顔をさらけ出すと「息子の面影がある」と口にした。祖父は腕を組み黙つてそんな二人を見つめていた。

トウカは父に引き取られた弟、ハルアキの姿を探したが、結局そのときに会うことはなかつた。

十年ぶりの弟との再会は唐突だつた。セミの鳴き声が街中に響きわたるようになつた初夏のころ。

「木瀬津春秋（きせつはるあき）です。よろしくお願ひします」

ハルアキはトウカのクラスメイトとして現れたのだ。

ありきたりな自己紹介に教室中は主に黄色くざわめく。

その原因は主に容姿。ぶつちやけハルアキの容姿の良さにクラス中の女子は浮き足立つたのだ。

曰く付きのイケメン転校生がクラス中どころか校内をも巻き込んで問題を起こしたのはまた別の話である。

ここでの問題はそこからだつた。一回目の席替え以来トウカの定位置だつた窓際最後尾、その隣の席が転入生のハルアキにあてがわれたのだが、ハルアキは自分の席をスルーしてトウカに近寄ると。

中腰になつてトウカに顔を近づけた。

「う～む」

と唸りをあげ、トウカをまじまじと観察しつつ頸に指をあて考え込む。

視線に耐え切れずトウカはガクガクとした動作で顔を背ける。そして何を思ったのか、ハルアキは自然な手つきでトウカの小さな頭を、がし、と掴むと、正面を向かせ、ぺろ、とのぞき見する前髪をめくつたのだ。

トウカの素顔を見たときのハルアキの表情の代わり映えといったら、つぼみが一瞬で花咲くようなそんなありえなさだった。

しかし、次に発した言葉のほうがもつとありえなかつた。

「ねえ、君、かわいいね、彼氏とかいるの？ よかつたら俺と付き合わない？」

かちり、と音を立てて、トウカの体内時間は止まった。

午前の授業が終わり、昼休みに入るなり、ハルアキはまたしてもトウカの席に近づいてきた。

そして、クラス中に奔つた緊張と不自然な静けさをよそに話しかけてきた。

「ねえ君、名前はなんていうの？ サツキからずっと見てたけどなかなか笑わないね、現国の先生あんなに面白いこと言つてたのに、少しは笑つてあげないと、あの先生、更にハゲちゃうよ？」

机の上に母お手製の弁当を広げていたトウカは、一瞬横目でハルアキの姿を確認。無視を決め込みまたカクカクと首を捻つて顔を背ける。

しかし、ぱし、と、今度は両手で頭を挟まれるとまたしても正面を向かされてしまった。

トウカの目の前には弟の満面の笑み。端正な顔立ちはたしかに女子ウケがいい。

「そんなことより、俺は君が笑つてくれたらうれしいな？」

普通の人ならその一枚目な微笑みにつられて笑ってしまっただろ  
う。

しかしトウカは笑わなかつた。

というか笑えなかつた。状況が。

ただでさえ人との接触を断つてきたのに、いきなり告白。しかも初対面の転入生に。しかも本人は気づいてないだろうが弟に。しかも歯が浮くせりふを恥ずかしげもなく吐いてくる。

耐えることは得意なほうだったが、さすがのトウカもこのときばかりは痺れを切らした。

がた、と音を立てて立ち上ると、トウカは自分の頭をホールドしていったハルアキの左腕をがっちり掴む。

そのまま引つ張つて教室を飛び出した。

「何処行くの？」

あくまでやんわりと疑問を投げかけるハルアキを無視しつつトウカはつかつかと歩を進める。

終着点は体育館裏。

ここなら、人目につくことはない。

トウカはハルアキを見据える。制服の内ポケットをまさぐるとそこから学生証を出した。

それをどこぞの副将軍の印籠のようにハルアキの前に掲げる。ははあー、という土下座の代わりに、

「お、やっぱり可愛い。でも直に見たいな」

おかしい。ハルアキのリアクションが予想の斜め上だ。訝つてトウカは自分で学生証を見みてみる。

中学の、それも三年の中ごろにとつた本人証明の写真はトウカが髪を伸ばして間もない（伸ばす前も、もともと長かったのだが）ころのものだ。そこにはカメラに向かつて微笑んでしまつてのトウカがいた。

これを見て、ハルアキはトウカが自分の笑顔を見せるために体育馆裏に連れてきたと思ったのだろう。

が、トウカの本当の目的は違う。

トウカはもう一回ハルアキに学生証を掲げなおすと、目的を強調するため、学生証の一部 生徒の名前の欄を指差す。

身長差があるため、ハルアキは腰を折って学生証に見入ると、その名前を読み上げた。

「敷……冬夏？」

かくかく、とトウカは何度も頷く

「冬夏？」

かくかく。

「えつと……姉貴？」

ハルアキはまだ半信半疑といったふうに顔をそらし、後ろ頭を搔きながら姉に問う。

そんな弟に向かつてトウカは力強くカクと頷く。

「うそ？」

けつこうなさけない声がハルアキの口から漏れた。  
かくり、とトウカは頷く。

「え？ あれ？ だって、姉ちゃん俺より大きかったじゃん？」  
錯乱したハルアキは意味不明なことを言い出した。

完全に自分の身長が百八十近いことを完全に忘れた発言である。ハルアキ頭を抱えうずくまる。そのまま『考える人』を超えるクオリティでうーんうーんどうなされ始めた。

そして、ここで、と糸が切れた人形のようにその場に倒れこんだ。こうして姉弟は十年ぶりに本当の再会を果たした。

曰くのイケメン転入生が転入初日に気絶して保健室に運ばれた真実を知る者は少ない。

## 人形は啼かない。参

陽は傾き、窓から差し込む橙色の光は少女の横顔を照らす。

ふと、少女の意識は微睡まどいみから引き上げられる。

どうやらいつの間にか眠つていたらしいトウカかは腕から顔をあげ、身体を起こす。

机で寝たにも関わらず不思議と眠氣や独特な疲れは残つていない。それとも、夢のせいだろうか。

昔の夢を見た。一年前、ハルアキと再会した頃の夢。

報復屋と出会つてなかつたころの話だ。

結局、その後、あの事件でトウカの危惧したようないじめは起こらず、それどころか転入生をシメ上げたとして、いつときの間、時の人として怖れられるハメになつた。

思い出し、トウカは思わず口元を緩める。いわゆる思い出し笑いとうやつだ。

椅子を引いて立ち上ると、背中にかかるつていたらしいジャケットが床に落ちた。

寝ていたトウカに誰かが掛けてくれたらしいそれを慌てて拾い上げ、トウカは首を傾げてやさしさをくれた人物を特定する。暇もなく、

「起きた？」

声を掛けられた。

声の主はサイ。斜向いのデスクでパソコンをいじつっていた。びっくりしてトウカは周りをきょろきょろ見渡す。

どうやらオフィス内にはサイとトウカしかいないらしい。もしかしたら今の一人笑いを見られたかもしね。と推量。トウカは顔を赤くする。

「どうした？」

それを訝つたサイは心配そうにトウカの顔を覗き込む。

トウカは首をぶんぶんと横に振つて問題ないことをアピールする。「なら、いいんだけど……。俺、今からこいつ返しに出かけてくるから留守番頼める?」

「言つてサイは龍之介のリードを引っ張る。  
シベリアンハスキー

「こくこく」とトウカは頷く。

思えばトウカにとつては散々な一週間だった。オフィスに出勤するたび飛びつかれ押し倒され舐めまわされ……。

しかし、龍之介が嫌いなわけではないトウカは少し寂しくなつてしまふんどうなだれる。

「誘拐しといでなんだけど、ほら、お別れ」

「でも……」

龍之介はサイがリードを持つてなかつたら今にもトウカに飛びつきそうな勢いだ。

「大丈夫、ツユリとかハルアキみたいに嫌われてないから」

「こく」とためらいがちにトウカは頷く。

「離すぞ」

「こく。」

サイは龍之介のリードを離した。龍之介もそれをまつていたかのようにトウカに飛びつく。

トウカもだてに一週間飛びつかれ続けたわけではない、龍之介が迫つてくる前に、背を向け走つて逃げた。

「おいおい」

トウカと龍之介はオフィス内をぐるつと一周追いかけっこしてふたたびサイの許へと帰つてきた。

トウカはさつとサイの背中の影に隠れる。

「待て!」

迫つてきた龍之介を手で制すと、サイは再びリードを握つた。そしてトウカへと向き直る。

「大丈夫だつて、龍之介はトウカと遊びたいだけだから」

言つて、サイは龍之介のリードをトウカに渡す。

「でも……」

トウカは言ひよどむ。しかしサイの目を見て決心したように、こ

くりと頷いた。

拘束が解かれた龍之介は再びトウカに飛びかかるつとする。

「ま、待て！」

先ほどサイがやつたようにトウカも手を前に出して、龍之介を止めようとする。

すると、龍之介はおとなしくその場で止まった。  
長すぎる前髪の下で手を丸くするトウカに、

「言つたろ？」

サイの得意げな笑み。

「お座り」

今度は声を張り上げずにトウカは言つ。

言葉に従つて、龍之介は素直にお座りをした。

トウカはそんな龍之介の前に膝をつくと首に手を回し抱きしめる。  
そしてサイがいつもやつてたようにわしょわしょした。

「ばいばい」

いつてトウカは俯く。

「ありがと」

その言葉はサイに向けて。

サイは笑顔のまま軽く顎をひく。

「じゃあ、準備してくるから、面倒みてて」

トウカの返事をまたずサイはオフィスの倉庫部屋へと消えていった。

龍之介の頭を撫で、立ち上がる。そこで、トウカは自分のデスクの上においてある小さな箱を見つけた。

プレゼント用の包装が施されている小さな箱。その緑色のリボンと箱の間に紙が挟まっている。

いぶかしみながらもトウカはその紙を抜き取り広げてみると、小さな紙だつたが丁寧に蝶で封がされており、紙自体も普段使っている

紙ではなく高級紙だつたので、もしかしたら開けてはいけないものかとも思つたが、紙の端に「To k a」とインク字で書いてあつたのでトウカは開けてみることにした。

内容は、トウカ宛の手紙だつた。

『ハッピーバースデー冬夏 僕は君が笑つてくれたうれしいな』  
小さな紙なので一言だけ。差出人不明ということになつてゐるが  
もうバレである。

ばかな弟、とトウカは姉の顔でうれしそうに表情をゆるめる。  
箱のほうも丁寧に開けていく、中身はヘアピンだつた。うす紅色  
の睡蓮をあしらつた地味でもなく派手でもなく、選んだ者のセンス  
の良さが窺える一品。

笑顔、なんて人前では見せることなんてここ最近ない。先ほどサ  
イに見られてしまつた思い出し笑いはノーカンである。

少なくともハルアキの前で笑つてあげられたことなんてなかつた。  
いじめに遭い孤立していったときのように笑えないわけではない。  
髪を伸ばす理由もなくなつたし、心を許せる多くの仲間もできた。  
ただ、人前で笑顔をみせるには、心が凍ついていた時間が長すぎた。それを溶かすのにはたとえ太陽でも多くの時間がかかるつてしまふ。

それと、単純に恥ずかしいという気持ちもあつた。あるいはそちらのほうが大きいかもしれない。

どちらにせよ、自然に笑えるにはまだまだ時間が必要そうだ。

「……」

数瞬の間、トウカはヘアピンとにらめっこする。

すると何かを決心したようにヘアピンを手にすると、以前ツヨリ  
から「トウカも鏡くらい持て」言われ、もらつてそのままにしてお  
いた手鏡をデスクの引き出しから出す。

長すぎる前髪を左側に流すとヘアピンで止める。慣れてないので  
少し不恰好になつてしまつたが、そこはアクセサリのセンスの良さ  
でカバー。どうにか、素顔をさらけ出すことに成功する。

そしてここからが肝心。

一連の動作をお利口に不思議そうに見上げていた龍之介へと向こう

直ると、にー、と自分が出せる精一杯の笑顔で笑って見せる。

その笑顔はまったく違和感などなく、それどころか、人形のように端正なトウカが無邪気に笑うといつ一つの相反する要素がまた違う魅力を引き立てる。その容貌はまさに鬼に金棒。なるほどと同姓から嫉妬を買うのも理解できる。もはや罪の領域の所業であった。

「なにやってんの？」

後ろからかかったサイの声に慌ててツコリはヘアピンを取つてサイに向き直る。

「龍之介、もういいか？」

「ぐぐぐ」と激しく何度もトウカは頷く。後ろ手にヘアピンを隠して。

「じゃ、行つてきます」

一人と一匹の足音が完全に遠のいたのを確認して、トウカは大事そうにヘアピンをもとあつた箱にしまつ。

「あ」

嬉しさでいっぱいのトウカの心の中に引っかかるところが一つ。トウカは何故か、双子の弟が自分も今日が誕生日だということを忘れている気がした。

人形は啼かない。参（後書き）

人形は啼かない。これにて了です。  
ありがとうございました（――）

「狗も喰わない。」

「世に蔓延る自称ハッカーめ、今から本物のクラッキングというものの見せてやる」

報復屋ゼットー諜報員、かざまつねい風祭彩

「ただいま」

無事、龍之介を飼い主の許に返し、任務完了と相成りゼットーオフィスに帰宅したサイ。ドアを開けるなり彼の目に入った光景は普段の見慣れたオフィスではなかつた。

机の配置が違う。社長席を除いた全てのデスクの上から荷物が下ろされ大して広くないオフィスの中央に寄せられている。所謂パーティーシフトな配置になつていた。見渡せば、机をせつせと運ぶハルアキとトウカがいた。

「なにしてんの？」

ダウンジャケットを脱ぎつつサイは姉弟に問う。

「マツとミモリが大きめ依頼を成功したから打ち上げやるつて、今買出しに行つてる」

言つて、ハルアキはワインクを一つ。

男からワインクなんて鳥肌ものだつたが、トウカのサプライズ誕生日パーティーも兼ねて、という合図だということが事前の打ち合わせにより分かつたのでサイはなんとか耐えた。

というかこの男は自分が誕生日だということを完全に忘れているのではないか？ と疑問に思つたサイだが、女性尊重と優先とおもてなしの心満載のこの男ならありえないことでもないので、それならそれで彼のサプライズになるかと思い黙つておくことにした。

「……誰が？」

とりあえず会話をつなげようと質問。

「ソコリ」

シコリが自分から行動を起こすなんて、なんとなく疑わしいのでトウカに視線を送ると、じくじくと頷き肯定を表す。

「どうして？」

やはりシコリが自ら雑用を引き受けたなどサイには不思議でしかたない。

「じゃんけん」

「へえ」

珍しこともあったもんだ。と感心しつつもサイはまだ説く。

「マツとモリは？」

便宜上とは「え主役のはずだが。

「帰つてくるのは夕方だつて」

「ふーん」

適当に返事をしつつサイは外の空気を取り入れようと窓を開け放つ。

部屋のほどよく暖まつた空気と外から流れ込む冬の乾いた空気が入り混じって心地良い。

「雨」

サイの行動を田で追つていたらしいトウカが呟いた。

つられてサイも空を見上げると先ほどまで青一色だった空は西のほうから灰色がかっていた。

「そういうことか」

納得するサイ。

首を傾げるトウカ。

サイは再びジャケットを着ると傘たてから傘を一本引き抜きドアノブに手を掛ける。

「どこ行くんだ？」

「迎えに行つくる」

ハルアキの問いに少し弾む声を抑えつつサイは答えた。

一杯に詰め込んだエコバックを一つ、両手にそれぞれ一つずつ持

つてツヨリは帰り道をとぼとぼ歩いていた。

普段なら雑用的な仕事を忌み嫌うツヨリのだが今日は違った。

理由は簡単。

ツヨリはその匂いを感じ、口の端を愉悦の形に歪める。そうした彼女の表情はどこか大人びていて非常に魅力的なのだが、もつたないことに今は誰も見ていない。

「きた」

西側から灰色になり始めた空はついにツヨリの上にも彼女が待ちわびていたものを降り注いだ。

ぱらぱらと控え目な雨は彼女の髪を濡らせずじしまじまくわくわく空気が肺を満たす。

今にも鼻歌でも歌いそうな足取りで、ツヨリは濡れることも厭わずに雨の中歩き続ける。

形のいい頤つた<sup>おとがい</sup>地面に落ちる零は涙を彷彿とさせ、哀愁漂う雰囲気が彼女の皆い魅力を更に際立たせた。水もしたたるいい男とはよく言ったものだが、濡れたツヨリはよりいっそう美しく見えた。

途端、彼女の体は雨粒との接触は断たれ、耳に一枚膜がかかつたかのように雨音が遠のく。一瞬感じた雨が止んだような錯覚は、視覚に感覚を集中させることにより回復した。

ツヨリは雨を遮った薄い影を見て、それから一秒にも満たない瞬間。幸せそうに目を瞑つた。

「おお、こうしてるとカッフルみたいだ」

その言葉がなかつたら最高なのに、と軽く落胆する。似合つてない、と心の中で批判する。でもそれを差し引いてもまだ有り余るやすらぎに胸が躍る。でもサイには決して気づかれないように、努めて無感動無関心を装つて、

「うぜー」

と返す。

「走ったんだけど、ちょっとおなかったか？」

視線を上げればサイの口から白い煙が昇っていた。

ツヨリは静かに首をふって答える。

「荷物もつよ」

「ありがと」

ありがたくツヨリは「バッくを」「つともサイに渡す。サイは苦笑いしながら「一つの「バッくを右手に持った。

「あとこれタオル。今が冬だってことを忘れないよ」と

傘を持つ左手を器用につかい、サイはツヨリの頭にタオルをのせる。

「ばかにするな」

言いつつツヨリはぞんざいに自分の頭を拭ぐ、拭き終わったタオルは首にかける。

「変わつてないんだな」

そんなツヨリを横目で見つつ、サイは懐かしげな口調で言った。

「何が?」

「雨が降りそうになると外に出る癖。しかも傘も持たないで

「そうだっけ?」

ツヨリは、ふふ、と鼻を鳴らすと、勢によく傘から飛び出した。少しサイとの間をとつて振り返ると、ぱつ、と両手を開く。そうした行動は普段年不相応に大人びたツヨリを幼く見せ、サイはつられて破顔する。

「私、雨つて結構好きかも」

「名前からしてそうだからな」

言いながら少し早歩きで聞詰めてきたサイが、ツヨリの上に傘を差す。

「やつぱり名前のせいかな?」

その問いは誰にでもなく、雨中に霧散するよりツヨリは言った。ツヨリは何故かスキップしたい気持ちになつた。しかし水溜りを撥ねないように心は躍らせないようにする。

「そいついえばハルアキの奴、トウカの誕生日は覚えてるくせに自分の誕生日は忘れてるみたいだ」

ツコリは小さくふき出す。

「なにそれ？」

「ホントだつて」

「双子なのに？」

「だからプレゼント渡すまで黙つておひづり」

「わかつた」

一指し指を自分の唇にあて、ツコリは微笑む。

「で、結局何買つたの？」

サイは一つのエコバックを持ち上げて中身を確認する。

「タケノ口とやつまじもと魚肉ソーセージと土鍋とカセントンロ」

「ん？」

自分の耳を疑うかのように、サイはエコバックを左右に広げて中身を再度確認。

「あとケーキね」

「で、これで何をすると？」

「鍋」

臆面なく言つツコリ。

「戻りづ。ツコリ」

「なんで？」

「今日はトウカとハルアキの誕生日だつてことは？」

「分かつてゐる、だから私手ずから手料理を振舞おうと……」

「よし、戻りづ」

「え？」

サイは傘とエコバック二つを片手に持ち替えるとツコリの手を引く。

ツコリは一瞬迷つたが、大好きな雨の中、もう一回買い物も悪くないなと思い、水溜りを蹴り上げて、踵を返したサイの背中を追つた。

## 少女は泣かない。 壱

「あなたと違つて自分の弱さを認めてるだけです」

報復屋ゼットー店主代理、あまみ つゆり雨海梅雨理

「むむ」

逢崎ひよりの学校には少し変わった男子生徒がいる。

運動神経抜群、成績優秀でやさしいとあるのだがなぜかクラスには溶け込まず、わざと目立たない用にふるまつてゐる不思議な男子。

子。

「むむむ」

ひよりは現在、その教室のドアの影に隠れてその彼を観察している最中だった。

ドアから顔だけを出し、教室の中を窺う。自分の教室ではたからどうみても変人的行為を何故しているのかと今のひよりに問えば、乙女だからという答えが返ってくる可能性はゼロではないだろう。

何故なら何を隠そうひよりも彼に好意を寄せる女子の一員なのだ。さて、何故ひよりがこのような変態チックな行為にいたる道程を辿ることになったか、その発端は今朝にいたる。

いつもよりはやく起きてしまったひよりは家に居ても所在なかつたので、母の愛情のたっぷりな手抜き弁当の完成と同時に、それを受け取り家を飛び出した。

そしてひよりは気づいた。学校に行つてもやることがないことに、元気な学校についてから気づいたのだ。下駄箱あたりで、がつくつと肩を落とし、ひよりは教室に向かつた。教室のドアに

手を掛け、開こうとしたところひよりの動きは止まつた。

教室の中に、先客がいた。

ひよりはすばやく膝を折り、しゃがむ。別に隠れる必要は無かつたのだが隠れてしまつた。心のどこかに少しやましい気分があつたのかもしない。という気持ちが分かつた気がして少女は少し大人の階段を登つたのであつた。

閑話休題。ドアの覗き窓から顔半分　目までを出して中の様子を窺う。頭がバツチリ出でるので、少しでも視線が向けられたらどうあえずジ・エンドなのが暇を持て余したひよりはまったくもつて気にしない。考えたら負けなのだ。ひよりは胸中で勝手に納得する。

「じほん」

ひよりは自分の脳内に咳払いを入れ本来の目的（覗き）を思い出す。音を出してばれたらジ・エンドとかは以下略。

教室内の人影は二つ。一人はひよりの知らない人物だった。

「む、眼鏡美少女」

セミロングのさらさら黒髪の眼鏡美少女は腕を組み、席に座る男子生徒を見下ろしていた。

その男子生徒こそがひよりが密か（？）に想いを寄せる相手、風祭彩まつさいであつた。

状況はおぼろげに確認できた。しかし、二人が話す会話までは聞き取れない。なんとか二人の肉声を拾おうと、ひよりは覗きをやめ、ドアの前に腰を下ろし耳を当て、盗み聞きを開始する。

しかし、何か会話しているようだがほぼ聞き取れない。

耳をこれでもかといふくらい強く押し付け、必死に教室内の音を拾おうとする。だが、声を拾うこと集中を割いていたせいで気づけなかつた。近づいてくる足音に。

やおら教室の扉が開く。

前に倒れなかつたのは僕倖だつた。これで風祭彩には見られない。扉を開けた人物と目が合つた。眼鏡美少女。

綺麗。ひよりは素直にそう思つた。

「あ……」

ひよりは覗きとその他もろもろ対する謝罪を口にしようとした。

しかし、口からこぼれたのは言葉にならない呻き。

眼鏡美少女のほつもひよりを一瞥しただけで声を掛けずそのまま立ち去ってしまった。

ひよりは立ち上がり少ししげになつた衣服を整えると、改めてドアに手を掛け、教室に入る。

想い人と二人きりの教室。

でも、声は掛けられない。何故なら逢崎ひよりは乙女で、しかも風祭彩とは一度も会話したことがないのだから。

時は戻つて昼休み。

一から四限までの授業中の乙女の苦悩を経て今に至る。

朝の所業を彷彿とさせる体勢でひよりは変態チックに教室内を覗き込む。視線の先にもちろん風祭彩。

乙女の名誉のために述べるが、ひよりは毎日乙のようなストーカー行為に及んでいるわけではない。今朝の出来事があつての今なのだ。

というか朝の美少女が気になつてしかたないというのに一心不乱に想い人を見つめ続けることに意味があるかあと問われれば否と答える他ないのだが、乙には、恋は盲目。とだけ述べておくしかないだろう。

瞬間。ひよりの後頭部に激しい痛み。

「何やつてんの？ ひより？」

友人からの痛烈な贈り物に後頭部をさすりつつ抗議の目を向ける。

「凶器は弁当箱かッ！」

視線の先、ショートカットのボーアッシュな少女 志織は冷ややかな流し目にヒールな笑みを貼り付けるという器用な業を持つて

クールにいなすと、ひよりが入れないでいる教室の中に消えた。

「そんなに恋しいなら告白してしまえば？」

「ひやあうつ！」

途端、後ろから、耳元に吹きかけられた吐息のよつた言葉にひよりはだらしない悲鳴を上げる。

「ムリムリムリムリ！」

ひよりは顔の前で手をふんぶん小刻みに振りながら、座ったまま後じさつて声の主から距離をとる。

その声の主、お嬢様のようにふわふわとした雰囲気を持つ、真綺はサディスティックに恍惚そうな笑みを浮かべると、人差し指をあごにあて、考えるそぶりを見せる。

「でも、才色兼備、文武両道つていうの？ 彼、結構人気あるみたい、ひよりちゃんじや無理かも」

「ええ！？」

ひよりの表情が目に見えて曇る。

「ウソだよ～」

実際、真綺の言葉は事実以外の何物でもないのだが。

「ちょっと真綺！」

無礼な友人に灸を据えようと立ち上がろうとしたひよりの膝の上に美術の教科書一式が渡される。

ひよりはあわててそれらを胸に抱ぐ。

「ほら、次、美術室だよ」

見上げれば、教室に消えた志織の姿。どうやら教室に入れないので、ひよりのために美術の道具を取つてきてくれたらしい。

「あ、うん」

少しばらついた教科書類をまとめ、両手で胸の前に抱えるとひよりは再度立ち上がるうとした。しかし、急激に立ち上がるうとしたためふらつてしまい通行人とぶつかってしまった。

ひよりはバランスを保てず床にしりもちをつく。

「す、すいません！」

ひよりはあやまりつつ、ぶつかってしまった相手を見上げる。そこに佇んでいたのは、

「あ……今朝の……」

眼鏡美少女だった。

「落としたよ？」

視線を廊下に向ければ、先ほどまでひよりの胸の中にあった教科書たちは床に散らばってしまっていた。

眼鏡美少女はスカートを撫でつけ手折り、綺麗な動作でしゃがみこむと、散らばった教科書を集め始める。筆箱まですべてかき集めて、向きをそろえ綺麗に整えるとひよりに向こうにひっくり返し、呆然とするひよりの前にそれを差し出す。

「逢崎さん？」

教科書の裏に書いてあったのを見たのであれば、名前を呼ばれて我にかえつたひよりはそれを受け取ると、

「あ、ありがとうございます！」

地面にへたりこんだままふかふかーと頭を下げる。ひより自身にも、なぜに敬語？ と自分自身の行動が謎だった。

眼鏡美少女はにつこりと美少女スマイルを浮かべると、教員棟のほうに去っていった。。

「大丈夫？ ひよりちゃん？」

特に危機感もなく真綺は問う。

「あれ、一組の人だよね、今年のミスコン確実だって言われてる……名前はなんだっけ？」

ひよりは志織に手をかしてもらい立ち上がる。

「そうそう綺麗だよね。雨海さんだっけ？ でもあの子いつも一人だよね」

「人と話してるとこみたことないかも」

「ん~、私は一回みたことがあるかも」

「うつそ？ 誰と」

「名前は分かんないんだけど……ほらこるじゃない？ 一年のあつ

「ちやい貞子みたいな先輩」

「だれ？ それ？」

「髪の毛すっごい長い、『んぐら』のちひかやい人」

「知らない」

友人一人の会話が飛び交う中。ひよりの頭の中はいっぱいいっぱいでつた。

だつて、眼鏡美少女と会話（？）をしてしまつた、とか、教科書を拾わせてしまつたとか、とかとかとか、と、ひよりは脳内で頭を抱える。そして抱えた頭の上を更に友人一人の会話は飛び交う。ミスコン確実？ 雨海さん？ いつも一人？ でも今朝は風祭彩と一緒に？ 告白回数？ 今年で一十件？ 貞子？

「うがああ～」

と、ひよりは脳内で情報をしきれずエラー音を吐き出す。頭を抱えたままものすごい角度に身体をねじつた。今にも脳内世界に身投げしようとしたひよりを、

「ちょっとひより！ 聞いてるの？」

志織の声が現実に呼び戻した。

「え？ ごめん。何？」

「今日帰りカラオケいかない？」

今日？ ひよりの中で何かが引っかかる。そして脳内スケジュールを開く。検索には一秒もからなかつた。なにせ今日は、

「ごめん！ 今日お父さんとお母さんの結婚記念日なんだ」

先ほどの泥沼な苦悩がなかつたかのように、すがすがしい笑顔で言い切る。

「まったくいまどきの女子高生にあるまじき発言だね、お母さんはこんな娘をもつて幸せだよ」

腕を田に当て、感極まつた泣きまねしつつ志織。

「ひよりちゃんお父さんとお母さん大好きだもんね」  
さらりと志織を無視しつつ真綺。

「うん！」

臆面なく言い切る姿は、まさしく全国の女子高生の娘を持つお父さん味方だった。

少女は泣かない。壱（後書き）

十日間連続更新宣言初日！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。武

逢崎ひよりは両親が大好きだった。

父は高校生のときにテニスの関東大会で優勝したことだけが誇りのいたつて普通のサラリーマン。

母は料理と花への水遣りが生きがいの専業主婦。

多くの子持ちの家庭が共働きをせざるを得ない中。父の仕事一本で生活していく逢崎家は割りと裕福なほうの家庭なのである。けれど金を持て余すことのない、そんな中の上な生活。贅沢はそんなにできないけれど食うに住むに困ることはない。姉妹はいなければ父がいて母がいて自分がいる。両親は愛を一身に注いでくれて、自分はそれに答えてすくすくと育つ。そのことがひよりにはこの上なく幸せだった。

時刻は午後七時を回った頃。

計画は狡猾。用意は周到だった。

ここまで時間を待つたのは自宅マンションに両親一名が揃つたのを待つため。

花束も買った。ケーキも買った。例年のデータから父もケーキを買つてくるであろうことを予想して小さめのものを買つてきた。ようは気持ちなのだ。感謝する気持ち、祝う気持ち、大好きな気持ち。結果的にお財布にもやさしかかったことは内緒である。

すう、はあ、とひよりは深呼吸する。お祝いの言葉は決めていた。別に決めるほどの量ではないのだが、こうゆう段取りはちゃんと準備してからないと本番で頭が真っ白になってしまふのは自明の理というやつだったので、一週間前から考えていたのだ。

ドアノブを回し、扉を開いて家の中へ。ただいまの言葉はあえてかけない。靴を脱ぎ捨て一目散にリビングへ、花束を構え、たぶんここで勝手に笑みが漏れるだらうことは織り込み済み、そしてこう言つのだ。

「結婚記念日おめでとう! 一人がいつも仲良くして私はうれしいよ! でもたまには私も混ぜてくれるともううれしいな!」  
我ながら恥ずかしいセリフだ。なんて思つたら負けだ。

すう、はあ、とひよりは深呼吸。

シミコ レーキョンは完璧だった。あとは実践あるのみ。  
ひよりは目の前のドアに向き直る。逸る心を抑え、計画を反芻しつつ、ひよりは意を決してドアノブに手をかける。

がちや。

ドアは独特の金属音を立てて 開かなかつた。いきなり計画は崩れ去つた。

「あれ?」

おかしい。ひよりは思つた。

一応ひよりは鍵を持たされてるが逢崎家は家族全員が揃うまで鍵を閉めることはない。時間を鑑みるに誰もいないといふことはないだろう。特別な日なのであるいは、なども思考をよぎるが、両親がひよりに何も伝えずにどこかに出かけるなど今までなかつたことなのでひよりは困惑した。

とりあえず、自分の鍵を出して開錠。ドアを開き我が家に足を踏み入れる。

中は薄暗い。誰も帰つて来ていないとこつことはありえないから、自分を待ちきれず、どこかに一人で行つてしまつたのだろうか、ひよりは思考をめぐらす。

「ただいま~」

なぜか、自宅の妙な薄暗さが不安になつてしまつて控え目にではあるが声をあげてしまつた。もつ計画もあつたものじゃない。ひよりは歩きなれたはずの廊下をそろそろと進んでゆく。

「お父さん?」いるの?

「お母さん?」いるの?

控え目に発したひよりの言葉が静かな廊下に響く。  
リビングへの扉を開く。

「ひつ！」

そこにはダイニングテーブルに突つ伏す母親がいた。

「ちょっと、お母さん！ 大丈夫？」

ひよりが近づいて母の身体をゆすると母はむくつと身体を起した。

「ひよりちゃん。お帰り

眠っていたらしい母は眠氣眼ねむけまなこを人差し指でこすると娘を見て微笑

む。

「もう、びつくりさせないでよ、鍵も掛かつてたし、お母さん倒れてるしごつくりしちゃったじゃん」

顔の筋肉が緩んで笑みになつてゆくを感じながら、ひよりは内心ほつ、と胸を撫で下ろす。

「じめんね」

そう言つて力なく母も笑つた。しかし、

「お母さん、どうしたの？」

手をだけた母の顔はあきらかに異様だつた。血の氣はひいてるし、目は充血して晴れ上がつてゐる。なにより右の頬に、

「あざ？」

ひよりが言つと、母はばつが悪そうに顔を伏せて、手のひらで痣を覆つた。

「え？ どうしたの？ それ？」

自然言葉に力がこもつてゆくのはひより自身にも分かつた。

「ひよりちゃん。それどうしたの？」

ひよりの言葉を黙殺し、母が指差したのはひよりの持つ、花束とケーキ

「え？ ああこれね、今日お父さんとお母さん結婚記念日でしょ？ だからお祝いに。ケーキはお父さんも買つてくると思つたから小さめで、花束はお母さんみたいに詳しくないからお店の人にお頼んでやつてもらつたんだ」

一応、母の質問に答えるものも、ひよりの口調には、母の頬に対

する疑問と焦りがにじみ出る。

「そういえば、お父さんは？」

しかし、ひよりは必死に笑顔を取り繕うとする。それがかえつて  
ぎこちなくなることに少女は気づけない。

瞬間。母の瞳から光が失せた。

「

「え？」

ひよりは身体が傾いでゆく感覚に見舞われる。そしてまず、自分を耳を疑つた、次いで母の言葉を疑つた。最後に現実を疑つた。疑問は後ろから解決していく。

垂れた手で太ももをつねつた。痛い。

空いた手で血がにじむほど拳と握つた。痛い。

犬歯で唇を食いちぎつた。やっぱり痛い。

最後の疑問は間違いということが確証された。

一つ目の疑問。

部屋に張り詰める空気、母の状態、自分の心臓の鼓動。もう答えは分かりきっていた。

あるいはもつとずつと前からわかつていたのかも知れない。

幸せだけを見て気づかないふりをしていたのかも知れない。

今日のこのひより行為だつて、この危機を察知しての行動だつたのかも知れない。

いつたい歯車はどこで抜け落ちたのか、そのことがひよりの中につかえてわだかまつた。

だから、訊くことはない。ひよりはそう思つた。これ以上母を苦しめてどうする。後日落ち着いてから改めて話し合えばいいそうおもつた。しかし、外れた歯車は思考と行動を逆行させた。

自然と口が開き、喉が震える、動搖のため視点は定まらない、ぎごれぎれの言葉は小刻みな振動を持つてひよりの口から零れ落ちた。

「お父さん。どうしたって？」

もはや母の蒼白な顔に感情を垣間見ることはできなかつた。

そして、淡々と、母は語つた。

「お父さん。他の女ひとと出て行つたわ」

ひよりの中の真実と信じて止まない小さな幸ハリボテせが崩れてゆく瞬間

だつた。

少女は泣かない。武（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 一日目！  
詳しくは活動報告にて！

「ちょっと、ひより！　聞いてる？」

「ああ、うん。なんだっけ？」

今日何度もやりとり、さすがに心配になつて志織は顔色を窺う。

「ひより大丈夫？」

「ひよりちゃん最近ぼけっとしてるとおおこよね、もしかして、本格的な恋わざらー？」

真綺も気を利かせて場を和ませよう茶化してみる。

「ほら、愛しの風祭くんはそこだぞー」

志織で箸で示した先には風祭彩が複数の男子生徒と談笑しつつ弁当をつづいていた。

「ああ、うん。風祭君ね……そういえば来月はバレンタインだね」名前を口にする」とすら恥ずかしがっていたひよりが、投げやりに、すんなりと想い人の名を口にしたことによって、志織と真綺は顔を見合せた。

そんな二人の心配もひよりの心には届かず。ひよりは購買で買った焼きそばパンを黙々と口に運ぶ。

「そういえば、ひよりちゃん最近弁当じゃないね」

「うん……ちょっとお母さん忙しくて」

言つて、ひよりは視線を落とす。

弁当。そういえば、料理好きの母の弁当はいつも色鮮やかで量はそれほどでもないが豪勢だった。いつの間からあの色とりどりの弁当を見てないのでどう？　ひよりは記憶を探る。確かに二ヶ月前、突然。昼休みに弁当箱を開いたときは驚いたが、作つてもらつての手前、母は非難できなかつた。それとなく理由を訊いたことはあつたが、母はただ、「ごめんね」と謝罪を口にするだけだつた。

思えば、すでにそこから家族の変化は始まつてたのかもしれない。

ひよりが気づかなかつただけ、いや、知つて目を閉じていだけ。

父が逢崎家を出て行つてから一週間が経つた。

正確には逢崎家ではなくなる家だ。

先日郵送で離婚届が届いた。父の署名と実印は記入済みで、後は母が必要事項を記入、役所に出すだけの書類。

こんな紙切れ一枚で家族の絆が、なんて月並みのことも思つたが、もともと壊れていたものを整えるだけだとひよりは沈んだ心で納得した。

ひよりはポケットの中をまさぐる。

そこには指輪が入つていた。

父と母の結婚指輪。当時奮発して買ったそうで、現状でも価値はそこそこものらしい。指輪と共にひよりの机の上に置かれていた父の最期の書置きにそう書いてあつた。だからそれを売つて当面の生活費にしなさい。と。

『母さんに話しても冷静に理解できないだろうから、ひよりに託す』に始まる父の手紙。内容を要約すると、

父が家から持ち出したのは洋服一式と通帳、その他腕時計、判子など必要最低限のもののみ。ローンを払い終えたマンションは好きに使ってよい。ひよりの学費も先ほど一括で払い終えたから安心して学校に通いなさい。

そして最後に、『めん。母さんを頼む。と少し下手くそな、まぎれもない父の字で、そう書いてあつた。

母に裁判を起こすつもりはないらしい。復縁なんてもつてのほか。つまり、ひよりたちは母子二人でこの先の生活を賄わなければならぬ。

一人を捨てた父は、希望を残して去つた。しかし、その希望が母を壊した……。

「あのさ、言いくらいのはわかるんだけどさ、私たちもさ、なんてゆうか、その……」

「困ったことがあつたら何でも話してね」

「あ、私の言葉を！」

それは友人一人の言葉。話したところで我ながらいい友達をもつたなと死んだ心にすこし色がつくのをひよりは感じた。

すう、はあ。

確か一週間前のあの日もこゝで深呼吸をした。

あの日を境に我が家はこんなにも入りづらさものとなってしまった。

意を決して扉を開く。

「ただいまー」

なるべく元気に聞こえるように言いながら玄関の靴を確認。母の靴が一足。投げ出されるように靴脱ぎ場に散らかっていた。それをそろえてからひよりはリビングへ向かう。

「ただいま、お母さん」

そこには一週間前とは比べ物にならないくらいやつれた母の姿。「『めんね、お母さん今日もお仕事見つかなかつた』

ちくり、と母の謝罪の言葉がひよりの胸にしみる。

母が働き口を探しに行くといつて毎日図書館で時間を潰しているのをひよりは知っている。

「大丈夫、私も昨日バイトの面接受けたし」

嘘だつた。

「ごめんね」

母はまた娘に謝る。そのたびに娘の心は傷ついてゆくとも知らず。

「お母さんお花好きじゃん。だから、お花屋さんとかどうかな。駅前のとことかいいんじゃない？ 私も学校の帰り道に通るからさ、そしたら毎日、お母さんどうしてるかなーって覗きに行つて……。  
だからね」

ひよりは必死に笑顔を取り繕つた。しかし、母の口から零れ落ちるのは、

「『めんね』

信頼を寄せていた者が離れ、愛していた人が壊れる。それを受け入れるには少女の器はあまりにも小さすぎた。

「なんですよ、お母さんが気にすることじやないって大事なものにひびが入る感触。ひよりはそれを壊さないように必死に笑顔を作る。

「ごめんね、ごめんね」

ひよりはもうなにも言えなかつた。

ただ娘に対してもやまやま続ける母の小さな背を見つめて、一つの感情が生まれるのはたやすいことだった。

「「めんね」「めんね」「めんね」

吐いた嘘は後から本当にすればいい。

ひよりは無理やりポジティブシンキングをつくつてパソコンに向かつた。バイトの求人を探すためである。

母とつゆり一人の生活において問題は山積みだ。父の書置きどおり指輪を売つて当面の生活費を確保するとして、その後の生活費、今の母の状態が続くようなら病院に罹らなければいけないかもしれない、しかし解決方法は簡単、自分が働けばいい。働いてお金を稼げばいいのだ。しかし、そう決心しつつも心のどこかで父が帰ってきて全て丸く収まる空想を描いてしまう自分がいる。

「いや」

ひよりは頭<sup>かぶり</sup>をふつていらぬ妄想を追い出す。

頭痛が激しい。めまいがする。そういうえば最近よく眠れない。授業にも集中できないし、どうにかして。こんな状況なのに、身体が思うように動かない。いや、こんな状況だからこそか？ こんなことなら父に言われたとおりもつと身体を鍛えておけばよかつた。

「父……」  
「嫌<sup>いや</sup>」

ひよりはもう一度、頭をふつていらぬ雑念を吹き飛ばす。

とにかく今は金を作らなければいけない。

ひよりはパソコンに向き直り求人案内をサイトを開く。

学校に帰りに働くとして生活を一人分賄うには普通の自給ではも  
の足りなかつた。一瞬暗い働き場も頭をよぎつたがもう一度、頭を  
振つて追い払おうとする。

しかし、気づいたときひよりの前のディスプレイには俗に裏サイ  
トと呼ばれるページが開いていた。そこにはありとあらゆる非合法  
な労働への求人案内や依頼窓口へのリンクが貼つてあった。

そこで、ふとひよりの目に止まるものがあった。それはサイトの  
端に貼つてあるバナー。

「報、復屋？」

マウスを握る右手が震える。鼓動が高鳴るのが分かる。砂糖水に  
吸い寄せられる蟻がごとく、否。飢えたハイエナが屍骸に食りつく  
ようにひよりの心はただ一点へとひきつけられていく。

この瞬間、少女の中で生まれた感情は、堰を切つたようであふれ  
出した。

少女は泣かない。参（後書き）

十日間連続更新宣言！ 二月一日～  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。肆

「報復屋ゼットー店主代理の雨海梅雨理です。はじめまして、噂に聞いたことのある復讐代行を受け持つ業者、報復屋。詐欺かと疑つたが、奔流となつた感情を前に少女の脆弱な理性は無力だった。

「はじめまして……じゃ、ないですよね、……あまみ、さん？」差し出されたツヨリの手のひらを受け取りながらひよりは田の前の美少女に言葉を問い合わせる。

報復屋店主代理を名乗つた少女は先日の眼鏡美少女だった。今日は眼鏡をしていないが確かに本人だ。

「あ、すいません。えっと、憶えてないですか？　こないだ私、廊下で教科書とか拾つてもらつちゃつて」

無反応を装つたツヨリに動搖して、ひよりはあわてて説明を加える。

「ええ、記憶します」

ツヨリは静かに言つた。ひよりは少し安心してほつと溜息をつく。更に、ひよりを驚かせたことがあった。

「あ、風祭くんも、同じクラスなんだけど私のこと覚えてるかな？」待ち合わせの喫茶店に現れた雨海梅雨理に付き添つように店内に入り、彼女の隣に腰掛けたのは風祭彩だったのだ。

サイはひよりの問いに、言葉を発さず小さく顎を引いて応えてくれた。

「では、依頼の内容に」

本来ならばネット上で大まかなやりとりは済ますようだが、今回はひよりが急ぎ、と無理を言って早めの用談を持ちかけたため、依頼内容の確認はまったく進んでいなかつた。

「お父さんが、他の女の人と出て行つちゃつたんですね」

ひよりは歯噛みし、言いつづらそうに言葉を捻り出す。

「それで？」

ツコリは冷たく、言葉を促す。

「お母さん、人が変わったように暗くなっちゃって、全然笑わなくなつて、私もつらくて……、お母さん。傷ついてるはずなのに裁判も起こさないつていうし、お金もうけとらないし……、あの、それで」

とつとつ、と事象と感情を織り交ぜて話すひよりはこまにも泣きそうだった。しかし、決心したように顔をあげるとツコリの目を見据えて言った。

「復讐。したいです」

ツコリも目をそらさず、ひよりの視線を真っ向から見据え返す。「理解しました。自分と母の生活を壊した者に報復をしたいと?」「はい」

力強くひよりは頷く。

「承りました」

静かに目を閉じてツコリは言つた。

「じゃあ…」

興奮して身を乗り出すひより、その勢いを削ぐようにツコリは言葉を発する。

「では、どちらに?」

「え?」

ひよりの思考と身体が硬直した。

「奪つたほうか、壊したほうか」

ツコリは一つの選択肢を提示する。奪つたほうか、壊したほうか、二つの未来の可能性。理解できずに口、惑つひよりの心中を察したのかツコリは説明を挿む。

「あなたの父親を奪つたその女性か、あなたの父親か、といつ」とです

「どういふことですか?」

若干の憤り覚え、感情を隠そとせずひよりは問う。

「確かに、あなたの家庭からお優しいお父上を奪ったのはその女性で間違いないでしょう。ですが」

淡々とツヨリは説明を続ける。言葉を切って、ひよりの目を射るようを見る。発する言葉は刃物のように、

「最後に出て行く選択をしたのはあなたの父親です。過程や誘惑がどうであれ、一つの幸せな家庭を壊したのは他でもないあなたの父親のはずです」

「つ！」

耐え切れず、ひよりは目を逸らしてしまった。下唇をかんで俯く。心が折れないように強く拳を握る。拳に視線を合わせて大丈夫、と心の中で呟く。

「で、でもその人が居なかつたらお父さんは」

「そう、その女が居なかつたら。」

あんなに優しかつた父が、家庭を捨て、母を壊し、自分を苦しめてるなんてひよりは認められなかつた。プライドに近いその感覚は目の前に居る人間に苛立ちを覚えさせる。正論は人を救つてくれることなんてないのだ。

あなたの言葉は嘘だ。人は人によつて変わつてしまつだから変えられた人に責任なんてない。

焦り、言葉を次ごうとしたひよりをツヨリの冷たい口調が遮る。「人は生きている間に数え切れない人と出会います。人の心が人の関わり合いで変わつてしまつたからといってそれを言い訳にすることはできません。結局、最後に決めるのは自分自身ですから」ひよりの言い訳は先回りしてあつさりと防がれた。まるで心を読んだかのようだ。

言葉を紡ぐ氣さえ起きない。

ひよりは歯を食いしばる。そして荒れる心をできるだけ隠す。

「強いんですね、雨海さんは」  
言葉には若干の棘があつた。

「いえ、あなたと違つて自分の弱さを認めてるだけです」

机の上で指を組み、あくまで冷たく、シコツは言こやる。

「そりなんだ……」

ふふ、と気がふれたかのようにひよりは笑いを漏らした。

「別に今すぐに決断していただかなくて結構です。もし契約を白紙に戻すといつことがあつてもキャンセル料は頂きませんのでゆっくりお考えください」

「ありがとうございます」

「構わないですよ。では、決断ができしだい私の携帯に連絡をください」

シコリは番号を書いたメモをひより向きにひつくり返し机の上に差し出した。

「はい。ありがとうございます」

ひよりはメモを受け取ると、伝票を取つて、早足にレジに向かつた。

少女は泣かない。肆（後書き）

十日間連続更新宣言！ 四日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。伍

「どうした？」

ひよりが去った後の喫茶店、隣でコーヒーを飲むツヨリに向かってサイは重々しく口を開いた。

「何が？」

不機嫌さを隠さずツヨリは言つ。

「機嫌悪そうじゃん」

「サイは気分がいい？」

普段名前なんて呼ばないくせに、あえて協調してツヨリは言つ。

「知り合いだからか？」

思い浮かんだ理由とは違つ答えをサイは口にする。

「いや、違う」

ツヨリは少し表情を硬くした。

「身内に復讐したとして幸せになれるわけがないんだ」

解りきっていた答えに、サイは押し黙る。ツヨリは更に言葉を続けた。

「彼女の母親は賢明だ。裁判を起きた旦那との接点を完全に断つて身を小さくすることによってこれ以上自分と娘がこれ以上傷つかないようにしたどうしてだか解るか？」

「娘を護るため？」

またしても思い浮かんだ理由とは違つ答えを口にする。それはサイ自身の希望する世界であるための答え。

「弱いからだ」

解つてる。サイは心中でそう呟く。

「弱いから、自分が傷つくことを怖れた。弱いから、娘を護れない自分自身を怖れた」

容赦なくツヨリの言葉はサイに浴びせられる。

「じゃあ、逢崎は強いから報復に望んだ？」

そんなわけない。答えは解つてゐるのに聞き分けのない子どものようにサイの口からは疑問がこぼれる。

「違うな、もっと弱かつたから報復を望んだ」

「まるで人の心が読めるみたいだな」

それは皮肉だった。実際ツユリは会つてない人の心まで解るよう語る。

「彼女はもう壊れている」

サイの皮肉は黙殺し、ツユリはサイの希望を断つようと言つた。でも現状、逢崎はまた傷ついている

それでも溢れ出た反発心は止まらない。

それは、ツユリに対するものでなく世の理に対するもの。サイはそれをお門違いと理解しつつもツユリにぶつける。ぶつけずにはいられなかつた。

「あたりまえだ。彼女の母親の行動はあくまでこれ以上傷つかないようにするもの、傷を癒すものじゃない」

その傷は報復屋によつて治せる傷なのか？ 答えは否。

「そこまで解つてて」

「なんで？ サイの中の疑惑が爆発する。

「なんで、逢崎に父親への復讐を進めるようなことを言つた？」

「おまえも解つていいだろ？ このケースで女にのみ復讐を行つことは不可能だ。女が傷つけばあの子の父親が傷つくのは自明の理。逆もまた然り。どちらか一方が傷つけばもう一人も確実に傷を負う。父親が彼女の言うとおりの人物であつたならおさらだらうな」ツユリは淡々と語る。たしかにそうだ。逢崎の父が、愛人のほうを選んで出て行つたのならその愛人だけを傷つけるのは不可能だ。愛するものが傷つくのを見て傷つかない人はいない。ましてや妻と愛人の間で揺れた心なら傷つくのはたやすいはずだ。

それはツユリの優しさか？ そう問おうとしたサイの唇はツユリの人差し指に押さえられる。

指を離さずツユリは立ち上がりうと体を背けて言う。まるでサイ

の心を読んだかのよ'ひ'。

「仕事だからだ」

ツコリは椅子から立ち上がり、名残惜しげにサイの唇から指が離れる。

伝票は上司持ち、いつものことだった。わだかまりが消えない仕事もいつものことだった。

肩をすぼめ、ダッフルコートのポケットに手を突っ込んで歩くツユリの背中をサイは追う。

「でもやっぱり、彼女は帰つてくるんだろうな」

報復屋店主代理を担う少女の背中はどうか寂しげだった。

少女は泣かない。伍（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 五日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女な泣かない。陸

「ちょっとといいか？」

冬の昼休みはポジション争いが激しい。皆、我先にとストーブ附近に移動するので、ひよりのようにぼけぼけている性格の持ち主に暖というは文明の力に当たることは許されなかつた。

そんなこんなで、ひよりが志織と真綺、と、いつものメンバーで少し肌寒さを感じつつ昼食をつづいていたときだつた。

風祭彩からひよりに声がかかつた。

「え？」

突然のことでの動転したひよりは思わず聞き返してしまつた。

「話があるんだけど……」

ひよりは田の端で友人一人の顔が華やいでいくのをひよりは見逃さない。

「え、つと今、真綺と志織とお弁当たべてるから……」

「（ちょっと、ひよりちゃん！？ なにいつてんの？…？）」

「（そーだよ！ チヤンスじゃん！ ……チヤンスじゃん！…）」

真綺と志織が取り乱す一方、ひよりの対応は落ち着いていた。サイが話しかけてくれたことで脳内お花畠になつて思考がフリーズしていたわけではない、ひよりの頭の中をよぎるのは先日の報復屋の件。

「そつか……」

座っているひよりは立つている彩を見上げる体勢にある。

気まずそうに後頭部を搔きつつ踵を返すサイをしつかりと上田使いで見据え観察すると。タイミングを見計らつて言つた。

「放課後なら……いいよ」

聞こえるか否か、それくらいの声量で、まるで少女が恥らうような声音で立ち去る憧れの人の背中に吐露する。言葉というには霸気が足らず、独白と呼ぶには訴えが強い。少女の口から出たのは計算

と詠つ呑の毒。少女の心に巣食つ感情は確実に糸を伸ばしていた。

世界が橙ぐんだ放課後、サイは指定したされたとおり放課後の教室でひよりの姿を待っていた。帰りのホームルームが終わるなり、当のひよりは鞄を持つて友人一人と教室を出て行ってしまったが、わずかな希望に賭けてサイは少女を待っていた。

といつても所在無く暇なので雲の数でも数え始めようとしたところで待ち人は現れた。

「風祭くん……」

ひよりはまるでサイが待っていたことが意外そうに言つた。そして夕焼けのせいかその頬は紅い。

「ごめんね、二人がうるさくてなかなか抜け出せなかつた

「うあ、いいよ」

「話つてもしかして……お仕事のこと?」

サイが肯定すると赤みがかつていた少女の顔に影が差す。サイはなるべくその暗い表情を見ないように言つた。

「あのさ、よく言えないんだけどさ、お父さん……えつと」

けれど、言葉は上手に頭に浮かばない。サイはいつたん言葉を切ると、問題のアプローチを変えようと試みる。

「逢崎は父親が好きか?」

「うん」

ひよりは控えめに頷く。けれど少女の目には明確な意思を感じられた。

「そつか、よかつた」

サイは少女の言葉に安堵し、穏やかに破顔する。サイは窓際に目をやる。

開け放つた窓から吹き込む冬の風は刺すように冷たく、先ほどサイが数えようとした雲を流す。それを一つ一つサイは目で追っていくとちょうど沈みかけの夕日に視線が行き着きサイは目を細めた。

「か、風祭くんは好き?」  
「親のこと」

沈黙の間がもたなかつたのか今度はひよりがサイに質問を投げかける。

「どうなんだる、父親に会つたことないからな  
サイは遠い田をして言つ。

「うなんだ、ごめんね」

「どうして?」

「あ、いや、なんか気まずいこと聞いたやつたかな、なんて  
居づらい雰囲気を作つてしまつたと思ったのか場を和ませようと  
必死に作り笑いを浮かべる。しかし、どうもその仕草がサイのツボ  
にはまつてしまつたらしく、サイは耐え切れず吹きだしてしまつた。

「な、なに?」

「なんでもない、逢崎つていい奴だな

「そ、そかな?」

「俺さ、父親どこのか母親にも会つたことないんだ  
別に自分から話すことでもなかつたがサイは話したいと思つた。  
このやさしすぎる少女に、自分はぜんぜん氣にしてない。と伝える  
ため。自然、口調も軽快になる。

「でさ、なんか特につながりのないおつさんが父親代わりに俺を育  
ててくれて、その人も数年前どつかいつちやつて、今、家族つて呼  
べる奴はツユ……雨海くらいなんだ」

「雨海さん?」

「そう、あいつもそのおつさんが何処からか拾つてきて、おつさんが居なくなるまで、おつさんと俺と雨海ともう一人と一緒に暮ら  
してた。まあ、おつさんが居なくなつてからは別々だけど……だから  
さ、寂しくなんてなかつたから逢崎もあんまり気にすんな  
ひよりは短く顎を引いてと首肯する。

「風祭くんはそのおじさんのことのが好き?」  
「嫌いだよ」

即答。考えたのではなく自然に唇が言葉を紡いだ。サイ自身にも

自分の声のトーンが一段階下がったのは分かった。

「だから、かな、自分を育ててくれた人を嫌いになる気持ちは分かってるから、逢崎とかほかの俺の周りの人には俺と同じ気持ちを味わってほしくないんだ」

一瞬、淀んだ空気を振り払おうとサイは明るくスイッチを切り替えて言う。

「つまり、なんていうか今回のことなんだけど……」

「いいよ、うん。わかった。大丈夫だよ、風祭くん」

言つて、ひよりは一度深呼吸をした。そして、今日初めてサイと目を合わせと真剣な目つきで言い放つた。

「私、お父さんのこと、大好きだから」

「そつか、よかつた」

満足そうに頷き、サイは鞄を拾うと教室を出ようとする。

「ち、ちょっと待つて」

「あの、私の友達、真綺と志織との約束があるんだけど、その「なに?」

ぶわっとひよりの顔が真っ赤に染まる。サイはひよりの返答を待つように首をかしげた。

「あ、あの方！ 風祭くん！」

目をぎゅっと瞑つて、両の手は膝の前で硬い握り拳を作つて、ひよりは言った。

「ま、また明日あ」

氣抜けするような言葉は尻すぼみに消えていった。それでもサイには届いたようで、

「うん、また明日」

サイはそう残すと教室を去つていった。

サイが去つていった教室でひよりが吐いた大きなため息には安堵と後悔が絶妙にブレンドされていた。

生まれてはじめてのサイとの会話。友人一人の盛大な勘違いを大

きく裏切り、予想通り報復屋の話だったが、サイの言葉には終始ひとりを気遣つた想いが含まれていた。今のひよりにはそれで十分だつた。本当は真綺と志織に告白するように言われていたのだが結局言つことができなかつた。けれど、それで十分。

家庭を壊した者に対する復讐心もサイに対する恋心も今は凧いでいた。

学生鞄にしまつてあつた携帯電話が鳴つた。さつそく出歎龜心を働かせた二人からの連絡要求かと思い、少し億劫そうにケータイを引っ張り出す。『はいはい、予想通り失敗しましたよ』なんて報告の言葉を考えながら、一応着信相手を確認しようとディスプレイを見る。

ひよりは息を呑んで電話に出た。

「……もしもし？ お父さん」

そう、それは父からの着信だつた。

少女な泣かない。陸（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 六日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。漆

「契約は以上でよろしくですか?」

「はい」

父からの電話からわずか一日、ひよりは件の喫茶店にて報復屋との契約を交わしていた。

「お支払いのほうですが……」

報復屋の店主代理の少女 ツコリは申し訳なさそうに眉根をひそめる。

「あの、お金はないんですけど、これなり」

そう言つてツコリが差し出したのは父から授かつた結婚指輪だった。今は母のも合わせて二つ、約束を誓い合つたはずの掛け替えのないものが今、机の上で復讐に変わろうとしていた。

「サイ」

ツコリはそれを丁重に受け取ると、隣に腰掛けるサイに渡す。サイはそのうちの一つを取り上げると目前に翳した。しばしの間見入った後、静かに机上に置くとツコリに向けて報告する。

「本物の白金だ。」プラチナ「れならおつりがでる」

ツコリ、ひより両名は頷くと、ツコリはひよりに向き直る。

「差額分は現金で構いませんか?」

「はい、問題ないです」

指輪を売つてしまえば生活の最後のつてが消えてしまう。しかし、ひよりには後悔の念はかけらもなかつた。

「今回の契約料は……ですでの、こちらでどうでしょうか?」

ツコリが電卓でたたき出した数字を見て、ひよりは顎を引く。ツコリも笑顔で頷き返すと、

「では、この件を担当する風祭のほうから説明がありますので、私は退席させていただきます」

椅子を引き、立ち上がった。

ひよりとサイは一人、取り残される。机には一度も口をつけられていないコーヒーが湯気を三つ立てていた。

「あの……」

先に口を開いたのはひより、しかしそれは自分が発言するための断りというより相手に発言を促すものだった。

少女の尻すぼみに消える声につられて、サイも重々しく口を開いた。

「……本当に、いいんだな？」

ひよりはサイの目を見据える。これはサイを裏切ってしまったことになるのだろうか。そんな可能性も考えたが、今はそんなことどうでもよくなっていた。ひよりは誓っていた。ほかの誰にでもない自分自身に。

「私、決めたから」

明確に、淀みない声で言つてみせる。

「わかった」

するとサイは目を瞑つて何かを考えるように静かに頷く。

「これから、依頼内容の説明に入ります」

「いいよ、敬語なんて」

「今回の報復手段は偽装集団ストーカーで生きたいと思う」  
サイはポケットから出すと、机の横に備え付けられている紙製のテーブルナップキン一枚取り出す。それから、何を描くわけでもなくその上にペンを走らせていく。

「ストーカー？」

その単語は知っていた。しかし、今回の報復にどう結びつくのか分かりかねてひよりは小さく首をかしげる。

「そう、対象に大衆に監視されていると錯覚させ、精神的に追い込む」

喋りながら、サイは紙の上でペンを踊らす。始めはなんの計画もなさそうに動き出したペンが作り出したそれは次第に全体像が浮き

彫りになつてくる。何かの模様にも見える。模様は左右どころか上下すらに同一点がみあたらないにもかかわらず、しかし、どこか統一感がとれていて。幾何学めいた何かだろうか、と、ひよりは一瞬疑問に感じたが深く考えないようにした。

「通常、個人的に行う行為を組織的に行うことにより対象を精神的に追い詰める」

説目を続ける間もサイの手は止まらない。その手ばかり目で追っていたことに気づいたひよりはが顔を上げるとサイの両目はしつかりとひよりを見据えていた。ひよりはあわてて再び視線をサイの手に戻す。

「逢崎？ 聞いてるか？」

「え！？ し、集団つてことは、な、何人もつくの？」

焦つてどもつてしまつた。ひよりは気づかれないように小さく深呼吸を入れる。

「いや、あくまでそう錯覚させるだけ、実行するのは俺一人だよ」

「そ、そなんだ」

「説明は以上だ、質問はあるか？」

正直説明は上の空だった。しかし、この人ならまかせられる。そ

うひよりは思つた。

「あ、あの、よろしくおねがします」

「はい、承りました」

笑つてそう答えるサイの笑顔は報復屋、店主代理にどこか似ていた。

少女は泣かない。漆（後書き）

十日間連続更新宣言！ 七日目！

## 少女は泣かない。捌

『「めんな、父さん。母さんとひよりを守れなかつた』

逢崎ひよりは電話越しに聞いた父の謝罪の言葉を決して忘れない。

『私は父を私から……私たちから父を奪つた女が許せません。報復は女のほうにお願いします』

逢崎ひよりは報復屋に放つた自分の言葉を絶対に忘れない。

日曜日、その名に恥じぬ燐燐とした太陽が放つ白い光は壯麗なる冬を演出し、雪化粧がなくとも白い景色が漂う休日の街は、行き交う人々の活氣とは別に冬独特的の静けさを醸し出していた。

そんな中、ひより、真綺、志織の三人娘は買い物にいそしんでいた。そのため少し遠出してきたのだから。遠出といつても電車で片道一時間もかかるのだが、三人は何気ない日常に潜む至福を中心の底から満喫していた。……のだったが。

「ねえ、ひよりちゃん。あっちの店なんてどう?」

若干一名を除いては息絶え絶えであった。

「え、まだ見るの? どうせ買わないんだからもうどこかで休もうよ」

両手いっぴに紙袋を持つ疲れ知らずの真綺に対してもひよりはどうとう弱音を漏らした。

「それじゃ、せっかく遠出した意味ないじゃない、今日は思う存分楽しみましょー」

あくまでポジティブな真綺は「おー」と一人気合を入れる。

「じゃあ、次で最後ね?」

真綺は両手を合わせてひよりは懇願。

ひよりは指示をあおごつと、志織のほうに手をやると、すでにベンチに腰かけダウン状態だった。普段はスポーツ万能な志織なのだが

が天を仰ぎみていかにも限界そつだつた。

「えへ、どうしようかなー」真綺は顎に手を当て考へ「あ、アイスでも食べよう?」提案。

「うん!」

好物のアイスを引き合いにだされてはひよりも形無しだつた。冬なのにとか関係ない。

「……やつと笑つたな」

その声に振り向くとベンチに腰かけた志織が二ヒルに笑つていた。ボーアイツシユな彼女がそうやつて笑うと様になつていてるものだから後輩からのバレンタインのチョコを独占していふといふのも頷ける。

「うんうん。ひよりちゃんは笑顔が一番だよ?」

対象的に真綺は花が咲いたようにひよりに微笑む。これで彼氏の一人も作らないんだから驚きだ。

「最近ひより元気なかつたから心配したんだよ?」

近頃のひよりの不審な行動のせいで一人に心配をかけていたことに鈍感なひよりは今初めて気付いた。そして、こんなにも優しい友人をもつたことを誇りに思つ。

「ありがとう」

屈託のない笑み。それは本心からだつた。

「ふう、疲れた」

本当は疲れていいたらしい、緊張の糸が切れたのか真綺は志織の隣に腰を下ろした。

ひよりの心には本当に二人への感謝の気持ちでいっぱいだつた。

「あ、ちよつとごめん」

ひよりは手を挙げ、二人に断りを入れる。

「あ、お手洗い?」

「うん!」

ちよつぴり嘘をついて、二人にプレゼントを買って「よしそう思つてひよりは街に駆け出した。

どのくらい、走つただろうか、休日の繁華街を掛けるものだから、何度も人とぶつかりそうになってしまった。でも、そのくらい嬉しかったのだから仕方ない。

ひよりは足を止めて、息を整える。それから、ども店でプレゼントを買おうか、あたりを見渡す。先日の報復屋の件もあり、生活費のこととも考えなければいけないので、あまり値段は負けないのだが……。

はた、とそこでひよりの首の動きが止まる。見覚えのある顔が目に入ったからだ。

ひよりは自然その姿を目で追つている自分に気付く。だと分かつていても、だめだと思えば思つほどにひよりの行動は理性から離れた動きをする。

それは、報復屋に復讐を頼んだ女と共に生活をしているはずの男。父だった。

一人には急用ができたとメールを入れて帰つてもらつた。我ながらなんと苦しい言い訳だ、なんて思つたが他のことに裂く思考が惜しかつた。

自制する理性もあつたが、やはり気になる。父の生活、女の容貌、そして復讐の進行具合。サイから後々報告があると事前の打ち合わせでわかつていたが、はやる気持ちは抑えきれない。

少しだけ、もう少しだけ様子を見て帰ろうと誓い、ひよりは物陰から父の姿を覗き見る。

が、しかし、やつぱりというべきか、ひよりには覗きの才能が皆無だつたようであつさりと父に見つかってしまった。

振り向いた父と目が合つ。あわてて、身を隠すも先に声を上げられてはしかたがない。

「ひより！」

良く響く、聞きなれた父の声。

「お父さん……」

ひよりは立ち上がり、おずおずと両手を挙げ父を呼ぶ。

そんなひよりは父はつかつかと近寄つてくる。父は歩調を緩めることなくそのままの勢いでひよりに抱きついた。

「会いたかった」

何かを言おうとしたひよりの口からは言葉は出ない。

抱擁はほんの一瞬だった。父は体を離すとひよりの目を見据えた。「父さんが今住んでるところの近くなんだけど……今から来るか?」ひよりは開きかけた口を咄嗟に閉じる。『女人人はこまるの?』とは聞けなかつた。

「ただいま」

何の変哲もないマンション四階。扉を開けて父がつぶやいた言葉にひよりの言葉はちくつく痛む。

「おかえりなさい、あら」

玄関先に現れたのはエプロン姿の若い女だった。

全体的にふんわりとした、やわらかくイメージの女性だった。その姿を見てひよりは母の若い頃の写真を思い出した。

居たたまらず女性から目をそらし、父を見上げれば満面のしたり顔だった。

「いらっしゃい、ひよりちゃん」

自然に、女性はひよりの名前を呼んだ。それが非情に不自然で作為的でひよりは吐き気を覚える。

「ほら、上がって、今ちょうどビターフ飯の準備ができる頃なの」逃げ出したい気持ちと一步踏み出していまの父の生活を確認したい衝動。ひよりの心は一いつ瞬に引き裂かれて揺れる。

「ほら、ひより」

決断もできぬままひよりは手を引かれひよりは一步を踏み出す。

女性の名前は晶子といつらしい。そう父から紹介された。リビングに通され、父とたわいもない雑談をぎこちなく交わして

いふと、キッチンから料理が運ばれてきた。

出された食事は見事としか言いようのない品々だった。

きのこのキッシュにオニオンスープ、鶏のワイン煮、フランス郷土料理風に仕上がった料理たちは味、色合い、栄養のバランスも文句の付け所がない。父の苦手な野菜類もちゃんと父が食べられるよう細かく切り刻まれていたのが憎かつた。

それからの食事はただ淡々と過ぎてゆくだけの時間だった。仲の良い、とりとめのない夫婦の会話、ただ一つの違和感、ひとりの存在。

そんなうつろいを打ち破るよつに、電話が鳴つた。リビングのテレビの横に設置されたファックス複合型の電話は飾り気のない呼び出し音を鳴らし続ける。

そうやって幾秒が過ぎただろうか、さすがのひよりにも一人の間に流れる異様な空氣に気付いた。

「修二さん……」

晶子が、父の名を呼んだ。唇はわななき、顔は青ざめている。あきらかに様子がおかしい。

それでも、箸を置き、たおやかな所作で椅子を引き、立ち上がる」と受話器へと手を掛けた。

「いい、俺が出る」

それを制止したのは父。厳格な顔つきで、荒々しく椅子から立ち上がり、受話器を取つた。そして、間髪をいれず、「もう一度とかけるなと言つただろ！」

叫んだ。温厚だった父の叫びなどひょりには初めてだった。そしてその意外性よりも恐怖が先行する。

怖い、感情の発露はとめどなく、未知に対する恐怖はあふれやまない。ひとりの中にはもう壊れるものなどない……はずだった。

「なんだ、金か？ 金が欲しいなら、いくらでもくれてやる。だから、やめてくれ、もう……だから

父は猶も捲し立て続ける。風貌は鬼、決して小柄ではない父だが、

ひよりには普段より一回り大きく見えた。思わず身を引いてしまう。が、下がれない。背もたれがあつたことに気づきひよりは上がった血流が下がるのを感じた。

「お金はだめだって言つてるでしょ…」

晶子が叫びながら受話器を持つ父の腕にしがみついた。

「おまえは少し黙つていろ…」

父はそれを振り払う。晶子は激しく床に尻もちをついて、痛みに呻きを漏らしながらも再度立ち上がり立つとする。

「ああ、こくら払えばいい、あ？」

お父さん

やめて、そつと想つた。しかし、ひよりの喉は震えない。

お父さん

やめて、感情を涙で云ふよつと想つた。しかし、ひよりの瞳からは光が失われていく。

お父さん。

お父さんお父さん。

お父さんお父さんお父さん……。

「だから、金は払うと…」

父に叫ぶ。晶子は父の手に噛みつき、受話器奪つ。

「あなたに払つお金なんて一銭もあつませんから…」

「俺はおまえのためを思つて言つてるんだぞ…」

振り上げられた拳が頬をはたいた。晶子は背中から床に倒れる。

「お父さん…」

ひよりは叫んだ。喉を震わせたのは感情よりも計算。

「もう、電話切れてるよ」

地面上に落ちた受話器を拾い上げ、父に掲げて見せて、冷めた口調でひよりは言つ。

「ごめんなさいね、取り乱してしまって、最近多いのよ変な電話が、

それも、いろんなどこからかやってくるみたいで」

頬を抑えつつ立ち上がった晶子が笑みを顔面に張り付けてひより

に向き直る。

今の電話、父は間髪をいれずに怒鳴りつけていた。しかし、ひよりの目に入ったナンバーディスプレイには見覚えがあった。記憶が確かならそれは父の勤め先のものであった。

つまりそれほど追い詰められているということなのだ。報復屋のおかげで。

胸中に言い知れぬ高揚感が宿る、今にも笑い出しそうなそれをこらえ、口を開こうとしてる父に向き直る。

「いつもは、晶子が一人のときにしかかつてこないんだが……」つまりは父がいるときにつかってきたのは初めてのようだ。

「そう、それが怖いのよ、まるで見張られてるみたいで、それだけじゃないの、変な手紙とか……、一人で出かけているときも誰かに見られてるみたいで」

晶子の呼吸は浅く荒く、腕は自身を抱きしめるように震えていた。

「くそっ！ 誰がこんなことッ！」

父が机に拳をあてる。低い音が部屋中に響き渡る。

「でもお金だけは……、お金だけは渡さないでちよつだいひよりにはこの女のそれが気に入らない。

「俺はお前のためを思つて……」

報復は順調。それは自身の目で確かめた。しかし、「なら、なあさらよ！ 私はお金が大事、それに向こうはなにも要求してこなかつたじゃない！」

「この女はなんだ？」

「晶子」

諭すよつな父の口調。

「私の言つことに従つて」

「ああ、そつか……。ひよりは全てを悟る。

「ああ……」

父の頷きに満足したのか、晶子はよつやく回りを見渡す余裕ができたようで、ひよりの存在に気づいたように笑みを作った。

「あら、ひよりちゃん。」めんないね、こんなことになってしまったし、今日はちょっと帰つてもらえるかしら？」

「はい……」ひよりは頷く。

にぶい音がした。晶子は顎の下から鈍器で打ち抜かれ仰け反る。勢いよく背中から床に倒れるす。そして、数瞬、痙攣のようにひくついたあと動かなくなつた。

「ひより……っ！」

父の呼ぶ声が聞こえた。しかし、ひよりにはもう関係ない。

ひよりの右手には、家から出でいく際、持ち出したのであるひ、父が毎週かかさず磨いていた優勝トロフィー。思えば、それだけが取り柄のつまらない父親だつた。

ひよりはそれほど重くないトロフィー引きずりながら、じりじり、と父のほうへと歩を進める。テニスラケットを持った男性がモチーフのトロフィーはフローリング調の床に血の道をつくりてゆく。

「…………」

両手を体の前に出して必死に娘を諭そうとする父が、ひよりの目には入つた。

だけど、その声はもう届かない。

ひよりは全てを悟つた。

あの女は父の金目当てで父に近づいたのだと。

それを知つてからはずか父は母と……自分を 捨てた。

許せない。

当然女も許せないが、そんな女に女のために自分たちを見捨てた、この愚かな男が赦せない。

二人の不幸を目の当たりにしても、ひよりの怒気が鎮まることなかつた。

ひよりはトロフィーを振り回す。

右から左へ、遠心力だ乗つたそれは男の側頭部に当たり、男は床へと転がつた。

それでも、男は立ち上がつた。打たれた頭を押さえ、上半身を小

刻みに揺らしながら膝立つ男は猶も口を動かし続ける。けど、その男の声は聞こえない。

動きが緩慢になつた男の息の根を止めぐべく、今度は上から下へ両手で、渾身の力を込めて、鈍器を振り下ろす。

潰れる音は対して部屋には響かず、男は倒れた。

しかし、まだ息はあるようで、男は必死にひよりに向かつて手を伸ばす。

その手がひよりの足首に触れた。

今度こそ確実に、そう思つて、ひよりは鈍器を振り上げる。

そこで、ふと声が聞こえることに気付いた。

下を見る。しかし男の唇は何も紡いではない。

「……いさき」

声に耳を澄ましてみると、それはどこかで聞き覚えのあるような声。

「逢崎！」

かやまつさく  
風祭彩の声だった。

「もういい、やめろ！ 逢崎！」

ついに、幻聴か、とも思いつつもひよりはそれに応える。

「なんで？」

その疑問は心からだった。

「なんでじゃない！ お前の父親だろ？！」

サイの熱の入つた説得が耳に入る。しかし、今のひよりの心は搖れない。

「どうして？ 父親は殺しちゃいけないの？」

その疑問も心から。

「おまえは親父さんに報復は望んでなかつただる」

「気が変わつたの」

ひよりは腕の疲れを感じてこのまま振り下ろすかと考えた。むしろ、どうして振り下ろして憎き男の頭を割らず、幻聴なんかに耳を傾けているのか。

「やめる」

サイは静かに言った。

心からの懇願。サイが俯いている姿が田に浮かぶ。しかし、「どうして止めるの？ 私はこの男が憎くて憎くてしょうがないの！」

それが、気に入らなかつた。湧き出た怒りはとめどなく少女の心を犯していく。

「なら、なんで……」

言つてサイの言葉は途切れた。そして大きく息を吸う音が聞こえた。

「ならなんでお前、泣いてんだよ！」

手でぬぐつて確認しようと思った。しかし両手がふさがっているのでサイの言葉が真実かどうかは確かめられなかつた。

「ごめんね、風祭くん

もう、何もかもいい。

「逢崎！」叫び声が聞こえる「よく聞け、俺はお前が」  
ひよりは力いっぱい腕を振り下ろした。

少女は泣かない。捌（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 八日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。玖

逢崎修一 逢崎ひよりの父の新宅の向かいのマンション。四階二号室、薄暗い部屋を複数のモニタの明かりが申し訳程度に照らしていた。

八畳ワンルームの部屋には収納家具は一切なく、ノートパソコン、モニタ、マイクなど様々な機械類とコード類が地面に散乱していた。

「はあ……」

その部屋の中心、座布団の上に胡坐をかけてモニターに見入っていたサイは短くため息を漏らす。

頭に掛けたヘッドホンを首に掛けなおす。両腕を伸ばし、体をして大きく伸びをする。

首を横に振つて「こりをほぐしたところで後ろから声がかかつた。  
「あ～ひどいひどい」

ツヨリだった。

ほんの数分前に仕事の進捗状況を確認しにきたツヨリ。事の顛末を立つたまま眺めた彼女の第一声がそれだった。

サイは拳を額に当てて俯く。

計画は完璧だった。一週間にわたる浅川晶子が出かける際のストーキング、手紙類のマーキング、盗撮、盗聴、そしてその告示。他にも多種多様な手段を尽くした。外堀から埋めて、ゆっくりと精神を蝕んでゆく。逢崎の父親のほうにも確実にダメージが蓄積されているのも計算のうち、そこは当然のリスクとして切り捨て、復讐行動は停滞なく進んでいた。

そこに何故か現れた依頼人、逢崎ひより。逢崎修一宅に設置された隠しカメラからモニタを通して彼女の姿を確認したとき、サイは一瞬その目を疑つた。何事もなく帰つてくれるることを望んだ。しあわせは叶うこととなかった。

精神的に追い詰められた修一、晶子の両名はあらうことかかかっ

てきた電話がストーカーからのものだと思い発狂したのだ。

サイは手元のノートパソコンで、修二宅の電話の着信履歴を開く、その番号を事前に漁つておいた修二身辺のデータと照合にかける。一致したのは修二の勤め先のものだった。

修二は自分の勤め先からの電話をストーカーからのものと思い錯乱状態に陥つた。

しかし、ストーカーからかかってくるはずはない。サイはカメラで修二「がいな」ときだけを選んで、無言電話をかけていた。それが、依頼人の要望だから。

「何が？」

サイは無感動に散らかつた床を物色しはじめる。

「好きでもない女の子に告白するなんて……」

ツコリは若干茶化しの声色を含めて言つてくれる。

しかし、それは面白がつてているふうではなく、サイの行動に対して不満はあるが咎められない。微妙な感情が籠つたような言葉だった。

「しかたないだろ、それしか方法がなかつた」

本来、就寝中に高周波の不快音を垂れ流す用に修二のマンションに設置したスピーカーだったが、まさかコンタクトをとるために使うなど夢にも思わなかつた。

でも、そのおかげで、ひよりの行動を止めることができた。

父とその愛人の狂つた姿に当てられたのか、ひよりはリビングに飾つてあつたトロフィーを振り回し、修二と晶子に襲いかかつた。

サイがもう少し止めるのが遅かつたらひよりは確実に父親を殺していた。

実際に危なかつた。ひよりが放つた最後の一撃は狙から若干逸れ、床に深い傷を作つた。そこにサイの言葉の力がどれだけ働いたのか分からぬが、結果ひよりは父を殺さなくてすんでサイは胸を撫で下ろした。サイの脳裏にはひよりが父親のことを好きだと言つたとき表情がよぎる。。

「それも向こうが自分に惚れてると知りながら」

ツヨリの責めるような口調が何故か少し心強い。

「誰かさんが目標ターゲットと依頼人の回りは徹底的に洗つておけといつものですから」

言い返すと、ツヨリは踵を返してドアノブに手をかけた。

「後始末は……」

「お任せください。店主代理」

お互に、背中をむけて言葉を交わす。

ツヨリは小さく頷き退出していく。

「はあ……」

サイは改めて安堵のため息を漏らす。

そしてやっとお田当てのものを散乱した機械類の中からお田当てのものを探し当てる。

手に持った無線機のスイッチを入れ、待機している一人に指令を飛ばす。

「マツ、ミモリ、聞こえるか？ マツは負傷者、及び依頼人の搬送

」

モニターで確認する限り修二も晶子も息はある。

「ミモリは依頼人が痕跡の抹消、指紋、監視カメラのデータ、目撃証言。足がつく可能性は全て潰してくれ」

了解の旨を告げる声と同時に二人は作業にとりかかる。

報復屋の仕事はばれたら終わりの一発勝負。常に保険の保険までかけておくことが基本だ。ここ数日、報復屋のメンバー数人にローテーションでその保険の役割を頼んでおいた。

モニター越しに一人の作業を確認しながらサイも散らかつた部屋の撤収に入る。

じつして、一週間にわたる長丁場の仕事は失敗に終わった。

少女は泣かない。玖（後書き）

十日間連続投稿宣言！ 九日目！  
詳しくは活動報告にて！

## 少女は泣かない。拾

いつもひよりはやく起きてしまったひよりは家に居ても所在なかつたので、母の愛情のたっぷりな弁当の完成と同時に、それを受け取り家を飛び出した。

そしてひよりは思いだした。学校に行つてもやることがないことに、学校についてから思いだしたのだ。下駄箱あたりで。がつくりと肩を落とし、ひよりは教室に向つ。教室のドアに手を掛け、開こうとしたところでひよりの動きは止まつた。

教室の中に、先客がいた。

ひよりはすばやく膝を折り、しゃがむ。なんてことはしない。とくに隠れることなくドアに付けられたのぞき窓から教室の中を窺う。

教室の中にいた人物は予想通り風祭彩かやまついろであった。彼がこんなに早くに学校に来ているのは久しぶりだ。そして今日は一人。

ひよりは深呼吸　せずに教室の扉を開く。

軽快な足音を鳴らして自分の席までたどり着くと、鞄を机の上に置き、振り返つて言つた。

「おはよう」

「おはよう」

あれ以来、サイと言葉を交わしたのは初めてだつたが、自然に言葉は返つてくる。

ひよりはあの日、ひよりがしたことの後始末をサイが全てしてくれたことをツヨリから聞いていた。

そして、あの日、自分を引き戻してくれた最後の言葉もちゃんと覚えている。

今、改めて思いだすと胸が高鳴るのが分かる。でもサイにはばれないように平静を装つ。

でも、ひよりには分かつていた。あの言葉の真意も、サイの気持

ちの在り処も、自分の心の片づけ方も。

「あのさ、風祭くん？」

「なんだ？」

冬の日差しは白く、サイの頬を照らす。

反射した光が少し眩しくてひよりは目を細める。そして、今更ながら自分がサイの顔を見て喋れていることに気がついた。

「このあいだの……、告白のことなんだけど……」

サイの真摯な瞳。それは彼なりの贖罪のつもりなのだろう。ひよりはもうこれ以上サイの表情が曇るところを見たくない。そう思つてひよりは言葉を続ける。

「ごめんね、今は家族が大事だから」

言つて……しまつた。しかし不思議と後悔はない。

「そつか

目を瞑つて穏やかにサイは頷いた。

それから、ひよりとサイはしばし、とりとめのない話をはずませた。

春はまだ遠い一人きりの教室。次の来訪者が訪れるまで、少女と少年の声はしつとりと響いた。

少女は泣かない。拾（後書き）

十日間連続更新宣言！ 最終日！  
詳しくは活動報告にて！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6816m/>

---

報復屋ゼットー "Am I the number Z"

2010年12月30日02時10分発行